
キミに逢えたから

hyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミに逢えたから

【著者名】

N1226F

【作者名】

h y o

【あらすじ】

恋を知らない16歳の口向が1人の少年と出会い、痛いほど恋にのめりこむ…

第一話 夏の雨（前書き）

この作品は私のオンライン小説のデビュー作です。
自サイトから引っ張つきました。

多少手直しはしてありますが、誤字脱字、見苦しい表現などあります
したら「一報くださいませ」

実話を織り交ぜてありますので「ありえない」と思つところが実話
部分だつたりします（笑）

どこりへんが実話なのか探りながら読むのも楽しいかも知れません
(笑)

では、拙い作品ではありますがあ宜しくお願ひします。

第一話 夏の雨

毎年、お盆の時期になると雨の日が多くなる。

この雨が降ると夏は終わりなんだと感じてしまつ。

周りの友達は「夏は出会いの季節だ」と浮き足立つばかり、
あたしには関係ない、どうでもいい事だ…。

別に興味が無いわけじゃなし、それなりに恋もした。
けど、虚しくて、淋しくて…。

『恋愛とはそういうものだ』と、あきらめがあった。

「あんた、まだ16なのに、人生損してるよ。」

そう言つのは中学時代の友人、月島唯衣だ。

そういう自分は中学時代から好きな男に未だに告白できなこでいる
…。

しかし、そのモヤモヤしてこむ自分の気持ちすら樂しこと感じてい
るみたいだ。

「ひなさま、いつからそんな冷めた子になつたの？」

そう聞かれても、私にもわからない。

…こつからだるい…

そもそも、「恋愛」したのはいつが最後だった?

親友の彼氏を奪おうとして失敗…でも、そいつに本気で恋はしてい
ない。

ただ、親友の反応を見たかっただけ…。

友達に男友達を紹介してもらつた事もあつたっけ?
最初は乗り気だつたけど、そのうちしらけた…。

そもそも、「恋」つて何よ?

ドキドキして、熱くなつて、ムキになつて、泣きたくなつて……

感情の抑制がうまく出来なくなる……？

そんな恋をあたしは望んでるのかな……？

そもそもそんな感情あつえるの？

「やつこいつ人に出会えやう？」

「…………まあね。」

出会えなきや出会えないで、無理に探やうとは思わない。

焦つてなこし、恋愛してなべても生きてこけるつて思つてゐるから。

…………。

かわいくない……

「可愛げがない」そんな事、自分が一番わかってる。
いつからここんなヤツになつたんだろうな……？

ただそれは、恋愛に関して冷めてこるつて事であつて……。

日常生活では、

家族にとつては「かわいい妹」、「優しい娘」だと思ひ。……多分。

お盆は何かと入り用だ。
あたしは土砂降りの中、

近所の『みまストア』でお盆用品の買出しに出かけた。

あたしは店の入り口で傘をたたみ、店内を見渡した。

雨のせいで客は少なくてレジ店員も一人しかいない。

この雨の中、来客が珍しいのか、レジ店員がこちらに田田を向けた。

「…………！」

レジ店員と田が合った瞬間、動けなくなつた。

「そんな自分に正直、戸惑つた。なんで顔が熱いんだろう……？」

あたしは、なんでドキドキしてるんだ？？？

必要な物をキッチリ買って、家に帰つても

さつきのレジ店員の顔が頭から離れない……。

そんなモヤモヤしてるときに、友人玲夏が家に来た。

いつの間にか雨もすっかり上がり、太陽が地面を乾かしていた。

「お盆と言つたら盆踊り！ 祭りじゃん！」

この時期はいつも、どこかで盆踊りが行われている。

「あ、そういえば……」

言いかけてやめた。

「なにさ？ 言いかけてやめないでよね！」

玲夏は言葉を促そうとする。

「『みまストア』昨日は雨で中止だつたけど、今日はやるのかなあ

……と、思つただけ

「あ～、来る途中、近くで音なつてたけど、『みまストア』かなあ
？ 行つてみようよ」

盆踊りは盆踊りでも、

店舗の駐車場貸切の盆踊りはなんとなく盛り上がりが違う。

田舎町のさわやかな楽しみでもあつた……。

屋台も出て、スーパーの店内には盆踊りからの流れで客が押し寄せ

る。

たいていの密はアイスとか、ビールとかをお買い求め。
あたしと玲夏もアイスを買おうと店内に入るもほぼ売り切れ状態…。

店から出ると雨のにおいと、生暖かい空気が体を包む。
ふと、出店の焼き鳥屋に目をやると、先程の『レジ店員』が焼き鳥
を焼いていた。

……！！

ダメだ！

彼を正視できません！！

なんでこんなに落ち着きがなくなつてんの？？？
あたし？？？
まさか、本気？？？

一田惚れ、あたしが…このアタシが！？？？？

どんな人かまったく全然ちつとも分からぬ人に惚れた？？

「どうしたの志摩ちゃん、汗すごいよ…キヨドつてるし…」
気が付けば顔中原因不明（？）の汗が噴出、他人にほとんど無関心
な玲夏が分かるほどに

拳動不審なあたし…。

おちつけ～、落ち着けあたし～。

そ、そうだよ…。例えコレが恋だとしても一田惚れから始まる恋な
んで、

きっと冷めるのも早いよ。

またいつもみたいにしらけるんだよ。うん。

明らかに戸惑つて…そんな自分が可笑しかった。

恋をすると、普段の自分では考えもつかないぐらい臆病になる。

彼を見つめるだけで胸が痛くなる。

彼に目を真っ直ぐに見る事ができない…。

そして、そんな自分に自己嫌悪する… それの繰り返しだ。自分が恋をしている事を確信するのに1週間かかった…

1週間経つて、唯衣に電話をかけてみた。

「好きな人ができるあつー？」

受話器から声が漏れるくらいの大音量で唯衣の声が響いた…。

私の家には電話回線が引かれていないので、

近所の公衆電話で一方的に相手にかける事しかできない。

私の家の近所…。

みまストアが一番近いわけで… と、自分に言い訳しながら、みまストアの入り口に設置している公衆電話で唯衣に電話している。あれから、彼の苗字が『片山』ということしかわかつてはいない…。店の中では片山君が今日も元気いっぴに働いていた。

「で、で?どんな男なのさ?ひなを魅了した男は?？」

「どんな…つて…」

ふと、片山君の方に目をやると、目が合つた…。

「ヤバッ…！-め、め、目が合つた…！」

密と目が合つことぐらい、相手は何とも思つてないのは当然わかっている。

ただ、自分が普通じゃいられなくなってしまう…。

…普通じゃいられない程…私は彼にハマつてる…

そんな自分に戸惑つてゐる。想像もしてなかつたから…

「ふんふん？ひなが冷静さを失つてしまつほどのにい男なんだな…？」

電話越しで私の反応を楽しむ唯衣。

「よし、あたし今からそつち行くから」

「は！？」

「そんないい男、一日お目にかかりたいわ」「

意気揚々とする唯衣に私は少々の不安を感じてしまつ…。

なにせこの女、友達の好きな男を取るのが趣味なのか？と思つよう

な所があるからだ…

そんな私の気持ちを察してか、唯衣はすかさずこう言つた…

「まさか、あんまりいい男過ぎて『唯衣が惚れたらどうしよう』？とか、思つてない？」

……図星です。

恋をしてる時の兆候。

自分の好きな男は、他のどの女が見ても魅力的に見えるのだと思いつ込む、

疑心暗鬼

「まあ、いいや。今から行くから、家で待つてよ。」

そう言つうと唯衣は早々と電話を切つた。

恋をするとキレイになるつてよく言つけビセ…

ホントなの？

確かに、少しでも可愛く見られたいつて思つから、

化粧にも服装にも気を使うようになつた…でも、それは外見だけ。

内面はどんどん醜くなる氣がする…。

好きな人が女の子とじゃれあつてゐるだけで嫉妬したり、

好きな人と自分の共通の知り合いがいると、その人を利用しようとしたりする…。

別に悪い事ではないんだろうけど、なんかなあ…

そんな事を考えながら家で唯衣を待っていた。

唯衣が家に来るのにそんなに時間はからなかつた。

「おまたせ」

唯衣は玄関先で靴も脱がないで立つている。

「行くよ?」

「は? すぐ行くの?」

「お菓子を買いに行くんだよ! ひなの家にないでしょ?」
と、理由をつけているが、

本当は『私の好きな人』を見物したくてウズウズしてゐるんだが、
気になることがあるといてもたつてもいられなくなる所が、唯衣らし
いけど。

みまストアに着くなり辺りを落ち着きなく見回す唯衣。

「ちょっと… 挙動不審なのやめなよ…」

注意する私の事などお構いナシに唯衣は私に訊ねてくる。

「ねえ、ひなの想い人、今日はいの? ? ?」

辺りを見渡してみる。

さつき唯衣と電話してたときにはいたんだけど

「いない」

私の一言に唯衣はがつかりする…。

そんな唯衣に私は言った。

「お菓子を… 買いに来たんでしょう?」

「そうだけどさあ…」

納得いかないといった歯切れの悪い返事をしながらお菓子を物色する唯衣。

そんな私達の後ろを女性従業員が通りかかった。たぶん正社員。

「あ……」

私の反応を敏感に察知した唯衣は私に問いかける。

「誰? 知つてる人?」

「福井美咲さんつていって、小・中学校の時はよく一緒に登下校してくれたな…

あの人の家に遊びに行つたこともあるし。憧れだつたなあ…」

「ふううん？でも、ひなには気付かなかつたみたいだけど？」

「うん、学年5つ違うしね…。彼女が高校入つたら接点がなくなつた。」

通学路が違うから一緒に登下校も出来ないしね。」

キレイになつたなあ…。福井さん。昔はかわいいって感じだったのに。

「今でも仲が良かつたら好きな人との仲も取りもつてもらえたかもしれないのにね。…よし、これとこれを買おう人の話を真面目に聞かずに買うお菓子に悩んでいたのかこの女は…それでも不服そうに辺りを見渡す…。」

そこに、片山君が通りすぎた。

片山君だ…私が口にするよりも先に、唯衣が反応を見せた。さすが唯衣、…めざとい！

…やつぱり片山君、唯衣の好み！？

すると唯衣は口を開いた。

「片山だ…！」

バカッ！見に来たのバレるじゃん！！

唯衣が大声で彼の名前を発した事ですっかり動搖した私は必死に唯衣の口を塞いだ。

私はそして、冷静になつて考えた…。

…『片山だ…！』 ???

唯衣とみまストアに来たのは片山君を好きになつてから初めてだ。
ナゼ唯衣は彼の名前を口走つたんだ?????

「…………」

私はゆつぐり唯衣の口から手を離した。

「なんで知つてんの…？」

私は恐る恐る聞くと唯衣の口からあつかけらかんとした答えが返つて
きた。

「だつて、同級生だもん」

「…………は…？」

「だから同級生なんだつてば」

唯衣と私は転校先の中学校の同級生で、片山くんは唯衣の元いた学校
の同級生だそうで。

「ひな…。もしかして好きな人つて……片山?」

「…………」

この時私は思つた。

世の中、狭い…!・・・・つか、この町狭い!と。

帰り道、唯衣は申し訳なさそうに言った。

「ごめんねえ…。あたし、片山とは仲悪かつたんだ…」

私は唯衣がなぜそんな事を言い出したのか、理解できなくて聞いた。

「唯衣は私が片山くん、好きになるの反対?」

「まさかあ!ひながようやく好きになれた男だよ?反対なわけない
じやん!」

ただ、お膳立てみたいな事はしてあげられないからさ

ああ。なるほどね…

もし、唯衣が片山君と仲がよければ、「紹介して」って流れになつてたと思つ。

唯衣も私がそれを期待してると思つて、そういうことを言つたのね。

「大丈夫。楽して好きな人と仲良くなろうなんて考えてないから…なんて、強がりを言つてみせていたけど、時間は無限にあるわけじゃなかつたんだ。

もう冬になつてしまつた。いや、もう春になろうとしてる…
片山君が好きになつてから、もう半年が過ぎようとしていた。

なんの進展もないまま、見つめるだけで半年。

スーパーのレジ店員になんて言つて話しかけようが…。悩んで半年。
他の人が見たら今の私は滑稽に映るだろ…。
私が…他の人をそう見ていたよう…。

気がつけば、片山くんは少し大人っぽくなつた…。

以前の元気な男の子という雰囲気が、陰のある男の子という間逆の雰囲気…。

それが、近寄りがたさに拍車をかける要因の一つなのかな…？

「なーまーいーきー」

家に遊びに来て、「ホットケーキが食べたい」と言つて聞かない唯衣と

みまストアで買い物をしていた時の唯衣の一言だつた。

「ピアスなんかしちやつてさ、片山のクセに。なーまーいーきー…」
片山のクセに…って所にトゲがあるが、私も男の人のピアスには少し抵抗があつた。

考え方が古いんだろうけど。

「たしか、ひなつて硬派な感じの男が良かつたんじゃないの? なんで片山なの? ? ?」

それは……出会った時は健全な男子っぽくて……。それを口に出すと、またつかかって来そうだから飲み込んだけど……。

「ねえ、ひな……。氣、悪くしないで欲しいんだけどさ……」

。

私が『一番聞きたくない』言葉を発する時、唯衣は必ず「ううう」とい方をする。

私は息を飲み込む。

「片山……彼女いたりしてね……?」

私も薄々感じてはいたんだ……。

「あ、いや、思い過ぎしかもしれないけどね……。」

唯衣が慌ててとりつくろつた。その後に深刻な顔になつて、

「やつて後悔するより、やらないで後悔した方が悔しいと思つんだ……?」

告白して振られるより、告白しないで相手に彼女が出来た方が悔しい……。

それはなんとなくわかるけど、もし、すでに片山君に彼女がいたら? 告白して振られた上に彼女がいるなんて言われたら……。

ダブルパンチだよね……? 傷つぐのが怖い。

恋は人を臆病にする……。イライラする……。

告白なんてされたことないから、わからないけど……。

知らない異性から告白されるってどんな感じなんだろう? 嬉しいのかな……? やっぱり不気味に感じる?

ずっとモヤモヤした気持ちのまま、見たくもない真実を知つてしまつた……。

『田原の「」愛顧ありがとうござります。』

当店「みまストア」は本年3月31日に

完全閉店する事になりました。

長年の「」愛顧、誠に感謝致します。』

ある日みまストアに行つたときに、入り口に張つてある張り紙を見て私は凍りついた。

「…………あと、一ヶ月……？」

時間は無限にあるわけじゃない……。

わかつていたはずだった。

モタモタしてゐるうちに周囲は私をおいて変わっていく……。
わかつてはいたけど……。

結局……そのまま一ヶ月はあつとこゝ間に過ぎて、

舞い上がつた私の恋は、不完全燃焼のまま終わりを告げた。

日向一6歳。……桜散る、短い季節の出来事……。

恋とは病みたいなものだと私はつくづく思うのです。

好きな人が目の前にいるだけで、動悸がして、鼓動が早くなつて、
h·i·g·h（躁）になつて、そして言いたい事が言えない。

好きな人が目の前にいなだけで、その人の事ばかり考えてしまう

…好きな人が病の原因なはずなのに、好きな人じゃなければその病を癒せない。まあ、失恋という荒療治があるけど…。

『みまストア』が閉店してから半年が経つた…夏、真っ盛り。私は、片山君を好きだつた事自体が夢だつたんじやないか？と思うほど、彼に会う前と何も変わらない生活をしていた。変わつた事と言えば、あまり電話をすることがなくなつた事。『みまストア』があつた時は頻繁に唯衣と電話をかけていた。…片山くん見たさに。でも、最近はバイトに明け暮れていた。別に私から電話をかけなくとも、唯衣は私のバイト先のスーパーに密として来るし、バイトが終わればそのまま唯衣と遊んでいるし…。遊んでいると言うか…つき合わされている…？唯衣の片思いの彼の家まで自転車でドライブ…。

彼の家まで行つたからつて、別に告白するわけでもなんでもない。…ただ、彼の家の前を通りかかるだけでなんだかどきどきする…らしい。

恋する乙女といつのはこういふものか？？まあ、私も玲夏もヒマだから付き合つてゐるけど、何が楽しいのかは不明…。ただ、道中の唯衣との会話は楽しい。それがつきあつてゐる理由かな。いつもと変わらない日常。

… そのはずだつた。

いつもと変わらない道順で自転車を走らせていた…。

その途中に姉がひいきにしてるガソリンスタンドがある。いつもはただ通り過ぎるだけだったのに、どうしてだらり~」の日だけは違つた。給油している店員に何故か目が行つた…。

「……………」

偶然が運命だと錯覚してしまいそうな瞬間だつた。

神様がもう一度チャンスをくれたのか?…とも思った。

自転車で通り過ぎるだけの時間がとてもゆっくりに感じた。

唯衣は思いつき私を振り返り驚きの表情で、唇の動きだけで何かを伝えようとしていた。

「か・た・や・ま」

唯衣の唇は確かにそう言つていた。

私は何も言わず、ソレを確認することもなく、力強くうなづいた。そう、給油していた店員は片山くんだった…。

ガソリンスタンドを通り過ぎてしばらくした後、唯衣が話出した。

「あたしが何言つてたかわかつてる?」

「え? 片山つて言つてたんじゃないの?」

私がそう答えると唯衣の表情が明るくなり、ハイテンションになつた。

「よ~かつたね~`~! いや~`~す~`~`~! これつて運命? ? ? ?

?

唯衣はまるで自分の事のように喜んでくれている。

私だつてうれしい…。私だつて嬉しい…。勝手に田が潤んできちやうのが自分でもわかる。

恥ずかしいくらいあたしは舞い上がつてた…。

季節は冬。…私が再び同じ人に恋をして、5ヶ月。

また、同じ事の繰り返し…。いつも見てるだけ。いつ、彼がバイトを辞めてしまつか分からない…いつ…この店が潰れてしまうか分からない…いつもあの日が私を脅迫してる…。

時期はもうすぐクリスマス。

渡せるかどうかわからぬプレゼントを買い、ソワソワしている私。

今度こそは失敗できない。

告白できないまま失恋するのはもういやだ。

クリスマスに勝負を賭けよう…と覚悟を決めていた…！

…のに…。

クリスマスイヴに体調を崩し、泥の様に眠り、目が覚めたときには

12月26日！の夜…

仕事から帰宅し、居間でくつろいでる姉が部屋から出てきた私に気付きました。

「おはよう。具合どうよ？」

「ん…おなかすいた…」

テーブルの上にはケーキとか、ごちそうとか、が並んでいた。

二人で暮らしている姉と私はクリスマスイヴに一人仲良く体調を崩し、食べ物を受け付けない体になつていたため、クリスマスのごちそうがイヴの日のまま手付かずで残っていた。

「さすがにケーキとかはヤバイ（吐く）と思うよ？お粥作つてあるから食べな。」

そう言うと姉はケーキをさせそつに口に運んだ。

なんでだか、誰かに愚痴りたくなつたんだ…

「クリスマスにさあ…告白しようとしてたんだあ…」

私はあきらめ口調でつぶやいていた…

すると姉は不思議そうな顔をして言った。

「あ…。スタンドの少年？みまストアにいたつていう…？…でも

さ、クリスマスじゃなかつたらいけないの？…来年まで待つ気なの？」

「…………」「…」

姉にそう言われて私はハツとした…。

「そりにえは、どひしてクリスマスにこだわっていたんだひつか…？？」「言いたい時が言つ時なんじやないの？」

他人事のよつにも聞こえるけど、姉の言ひ事は正しこと思つた。そして、姉の言葉が私に火をつけた…。

「うだよね…？…うだよね！私は妙に落ち着きなくソワソワし始めた。」

「あ、あの…姉ちゃん…病み上がりでこんな事言つたら怒られるだらうつけど…」

私の言いたい事を察すると姉の目が輝いた…。

「行くの？行く？具合大丈夫？大丈夫だよね！行つといで…」「女は恋愛話が大好物である…。『土産話を楽しみにしているよ』と姉は文句も言わず、私を送り出してくれた…。

スタンドまで行くと、彼の姿が見える。まだお仕事中だ…。

彼の姿を見た途端、いきなり緊張してきた…。

スタンドの斜迎えに電話BOXがある…。

唯衣に電話してみたけど話し中で、でも誰かの声が欲しくて…電話嫌いな玲夏に電話をかけた。

『志摩ちゃん？どうしたの？？』

「あ、夜に」めんね？…あ、あのせ、いきなりで悪いんだけじゃ…。がんばれ…って言つてくれないかな？」

『く…く…』

今にも逃げ出してしまいそうになる気持ちを少しでも勇気付けて欲しくて…。

『うん、いいよ。…志摩ちゃん、頑張つて。』

「ありがとう」…そう言おうとして、泣きそうになつた。

告白なんてした事ないから…。緊張で、心臓が痛いほどドキドキし

て……。

『なんかわかんないけど、終わつたら電話してね?』

「うん。玲夏、ホントありがとね」

そう言つと電話を切つた。

そして、スタンドを見ると片山くんが私服に着替えていて、帰るつとしているところだつた。

片山くんが店から出て、歩き出した。私も走り出した。

大きな道路を信号無視で横切り片山くんは歩いていく……。

私はその道路を渡りきれないでいた……。

「はやく……青になつてよお……」

やつとのことで信号が青に替わり、私は走り出した。

かなり前の方を片山くんが歩いている。

すごい雪で、かすんで片山君を見失いそつ……。

「やだよ……そんなのヤダよ……！」

私は力の限り走つた。ブーツが走りにくい……。

私が片山君に追いついたのは、片山くんが丁字路を曲がるつとしていた所だつた。

「あの……」

声が小さかつたのか、振り向いてもらえない……。

「あの……つ……」ようやく片山くんが振り返り、私は片山くんに駆け寄つた。

片山くんは少し驚いて不思議そうに私を見ていた。

やつと、言える……もう、言うしかないんだ……。

「あの……ずつと、……ずつと前から好きでした。……付き合つてる人、いますか?」

息せき切つて、これだけ言つのが精一杯だつた……。

だけど、結果がどうであれ、言えた自分が誇らしかつた……。

「…………」言われた片山くんは……困つたように頭を搔いていた……。

言われた片山くんは……困つたように頭を搔いていた……。

「…………困ったな…………」

やつぱり困ってる。困らせるために言つたんじゃないけど……やつぱり迷惑だよね……

「困ったな……君の事、よく知らないし……」

……「もつともな意見です。私もあなたの事よく知りません……。でも、だから知りたい。知らないから、知りたい。『困らせて』『めんなさい』。』そう言おうと口を開いた時だつた。

「携帯とか……持つてる？」

片山君の口から意外な言葉が出た。

だつて、断られると思つてたから……。

でも……私には携帯電話はない

「あ……ええ。」

「じゃあ、家の電話とか……。」

「『1』めんなさい……。私の家、電話回線引いてなくて……。いつも公衆電話で……」

「あー……。……そつか。」

そつ言つとおもむろに自分のポケットから携帯電話を取り出し、私に言つた。

「今から番号教えるから……書くものとか……持つてる？」

片山くんがくれたラストチャンスよー私はカバンの中を漁つた。

……ない。

「ない……？」

片山くんは哀れむよくな悲しげな顔で私を見つめる……。

……くうう……つ！

あきらめてたまるか……！

「暗記します……！」

そつ言つた私の頭から雪が落ちる……。

「すゞい雪……。頭とか、肩とか、雪……積もつてゐる……」

片山くんはそう言しながら私に積もつてゐる雪を掃ってくれた……。

私は彼のそういう優しさにグイグイ引きこまれていつた……。

「番号は〇九〇……」

片山くんははゆうくりと番号を読み上げ、私が覚えるまで何回も教えてくれた。

「……覚えた?」

「はい」

片山くんは優しく笑った。

「俺、正月は昼からずっとバイトで…んー…6日過ぎたら時間空くから、6日以降だつたら昼まで寝てるし、いつでもかけてきて。」

「これは、〇九〇だと思ってもいいんだろうか…??

これは、夢なんだろうか…? 这は、夢なんだろうか…??

ああ、いかんいかん。余計な事考えてると番号忘れちゃうよ…。

「かけてくれたらいいつでも会いに行くし。」

「…はいっ!」

やら…

「じゃあ、6日過ぎ…」

そう言ひて、片山くんは行つてしまつた。

…で? ねえ…これつて〇九〇つて事なの???

…あつけなさすぎじゃない??

悩んでた半年間つて一体…??

私は一人片山くんの後ろ姿を眺めながら立ち尽くしていた。

けど、片山君の歩いていった方向つて私の家と同じ方向なんだけど

…。

ここで一緒に歩いて行つてウザがられても得じやないしな…片山くん家つて、この辺だつたんだ…。意外と近所だつたりして…?

舞い上がり、いろいろな事を考える私だつたけど、簡単に手に入る幸せなんて所詮たいしたことないんだつて、思い知らされる事になる…

「告白したつてええ！？うまくいったの？えええええ！」

次の日唯衣に電話をし、報告をし、ほどなく唯衣と玲夏が家に来た。

「志摩ちゃん〜〜よかつたねええ！」

「まあ、相手が片山だつてのは気に入らないけどね…」

唯衣と片山くんは中学の時の同級生で、仲が悪かつたらしく、私が片山くんを好きな事に唯衣は納得がいくてないみたいだ…

「でもさ〜…片山だつたら何人か彼女いてもおかしくないと思つてたんだけどな…」まあ、それは私も思つた。

「でも私、ちゃんと『彼女いますか？』って聞いたよ

「で？『いい』って答えた？」

「ちゃんと聞いたもん…彼女いますか？つて…

。 。 。

ええつ？

あれつ？

…ちょっと待つてよ…？

『いい』

つて言わなかつたよなあ…？

唯衣も私の動揺を目の当たりにしてため息をついた。

「聞かれた事をはぐらかして、携帯番号を教える…か。女に期待を持たせるの得意だね。ひな…ヤバインじゃないので…襲われたりして…

な、なんか、唯衣の言つてることひわるが、ただの意地悪に聞こえないんですけど…。

「唯衣〜やめなよ、自分がうまく告白できないからつて志摩ちゃんに当たるの…」

玲夏の一言は唯衣にとつてきつい一撃だ。

さすがの唯衣もこれは効いたらしく、しばらく無言だ。

そして咳払いを一つ。…気を取り直してから私に忠告する。

「6日以降に電話してって言われて6日に電話しないほうがいいよ。

『待つてました!』…つて言わんばかりでしょ?…片山つてすぐ調子にのるから…」

餓てる女と思われるわけね…ガツついてるというか…。人に言われた通りにするつていうのもシャクだけど…

6日はおとなしく家に居て、7日になつてから片山くんに電話をかけた…。

『おかげになつた電話は、電波の届かない場所におられるか、電源が入つていなため…』

つながりません…。

その後、毎日毎日、寒い公衆電話で何回かけてもつながらなくて、やつとつながつたのは17日の夜だった…

『もしもし…』

「あの…」

『誰?』

電話の向こうの片山くんはなんだか不機嫌そうだった…

「あの、去年の暮れに告白した…」

『……………あー…』

……………あー…? ? ?

どういいう反応だつたら良かつたのか自分でもわかんないけど、今の反応はムカつく…。

片山くんは面倒くせうつむいて言つた

『なに?』

何、ナニ……なに?電話をかけて相手に言つて、一番ムカつく言葉。

『なに』とか、『何か用?』用があるからかけてんじやん!つて…。あー…もう、そんな事言わいたらお姉さん…言葉を失つてしまつ…。

「え……、あ、あの、明日、会えないかなって思つて。」

『明日?…明日はダメだな。』

勇気を振り絞つて言つた言葉を片山くんはアッサリと却下した…。

「じゃあ…あやつは…」

『あやつてもちょっと…』「めん…。』

いつならいいのよ…と、もう少しど声に呟ついた…。

言葉を失つた私に片山くんはこいつ提案した。

『…じゃあ…今から余ねない?』

「…今から…?え、でももう遅いし…」

『遅いつつもまだ7時だけど?』

…私、なんでこんなに警戒してんだろ?…

…。

唯衣が変な事言つから…

片山くんがすかさず言つた。

『…もしかして、警戒してん?』

「えええ?そ、そんな、?」…とは、

声がうわずつて警戒してゐるバレバレ…

『余にたい』

さつきの冷たい片山君からは想像もつかない言葉に耳を疑つた。

好きな人からこんなことを言われたら…

胸がキュンとなつても仕方ないじゃない…? ?

「え…? ?」

私はワザと聞き返してみる…。

『イヤなら別に無理にとは言わないけど…』

…?、どうする?…どうしよう?…?

今日を逃したら…このつ余れるか分からない…

「…いけど…」

私は言つてしまつた。

行動しない後悔の方がつらいくつて思つたから…。

『本当…?じゃあ……』

そうして私達は国道沿いにある大きなスーパーの前で待ち合わせる事にした。

私は大急ぎで待ち合わせの場所に向かった……。

私のほうが早く着いた。

…そりやそうか。急いで来たもんなん……。

それから5分後、国道の向こうからタバコをふかしながら歩いてきた……。

ガラ悪う……

つて……

彼、高校生じゃん!~メチャメチャ未成年じゃん!!~タバコ吸っちゃダメじゃん……?

「待つた?」

「いや…そんなに……」

「寒いしさ、行くトコないから俺ン家、来ない?『

『暗くなつてから男の子の家になんて!』つて……

考える私は考えすぎ……?

お固いつて思われるかな……?

そういう風に疑つてしまつのはふしだらなこと……?

そういう事しか考えてないつて思われるかな……?

私は片山君に頷き、彼の家に行く事にした。

「名前…なんていうの?志摩……」

私は彼が私の苗字だけでも知つていた事に驚いた。あ……。私の姉ちゃんが片山君のバイト先の会員だからか……。

「日向…。しま…ひなた…。」

「ひな…か。俺の名前は知つてるよね?」

「片山くん…でしょ?」

「そ、片山…学。…学でいいよ。」

不安は不安だつたけど、好きな人と一緒にいられるのは……

信じられないくらい嬉しいよ。

彼の家は待ち合わせの場所から結構距離があったけど、私にとっては短く感じた。

「お邪魔します……」

居間にいると彼のお父さんがいた。それでちょっと安心した。考えすぎだよなー……。

階段をのぼって、彼の部屋に通された。

結構……いや、かなり……散らかってる……。まあ、男の子だし……。

「かなり……散らかってるけど……。一応片付けてから出てきたんだけどね……」

一応、言い訳はしてみるわけね……。

「そこいら辺、適当に座つて……つて言つてもマットモに座れる場所べッドしかないんだけどね。

「あ、コート貸して。掛けるから……」

掛けるから……」

私は彼にコートを手渡し、彼は丁寧にハンガーにかけてくれた。

「一応ね、足の踏み場はあるんだけど……

ゆかは座れる場所じゃないもんね……。

仕方ないからベッドに腰かける事にした。

彼は距離を開けて私の横に座つた。

静まり返った部屋は会話もなく、音楽もなく……なんだか……す、ぐく居心地が悪い……彼を直視できない……。

そんな沈黙の中、片山くんが口を開いた。

「今まで付き合つた事とか……ある?」

「な、ないよ……？そんな事今まで興味なかつたし……」

私は即答した。

その後また沈黙……。

「一言二言余計だつたかなあ……？

やだなあ……沈黙つてキライ……。

私はふと横目で片山くんを盗み見た。

「……」

え…なんか。近付いてきてない…？

人一人分くらい開いていた私達の距離は少しずつ近づいてきてる…？

「…」

ヤバくない…？？？

いくらそういう事に疎い私でもこの雰囲気は明らかにやばいよ…
どうしよう…

そ、そうだ！帰っちゃおう！

これ以上変な雰囲気になつたら困るわ…！

再び、彼が聞いてくる…。

「エッチとかした事ある…？」

「…！」

好きな人の口から聞くその言葉に私は身を固くした…。
え…ちょ、ちょっと待つて…？？？

腰の辺りに明らかに私のじゃない手がある…。

彼が私の腰に手を回して、しつかり服をつかんでる…？？

そしてとどめの一言を彼は私の耳元でさわやいた。

「エッチしようか…」

「…！」

気絶寸前大パニック…

私は必死に首を横に振る。

体中の血が全部頭に集中してるんじゃないかつて位に激しいめまい。

どう返せばいい？彼に嫌われずにうまく断る方法は…？？

パニックな頭でそんな事を考えても答えは出てくれない…。

うろたえてるうちに彼は私をゆっくりとベッドに横たえた…。

その途端、もうどうでもいいかなあ…って思ってきた。

抵抗しても、惚れた私は彼から逃げられない…。だつたら…。

流された方が楽なのかな…………？

私がゆっくり田をつぶると、脣に感じた事のない感触…………。

初めてのキスだった。

好きで、好きでしようがなかつた人とキスしてゐる…………。

学は丁寧にキスを繰り返していく…………。

嬉しい…半分はそう思つてゐるのに…………。

なんだか虚しいよ…。どうしてなのかな?好きで仕方ないはずなのに…………。

キスをすればするほど、心の中が恋しくなつたりやつ感じ…………。

彼の気持ちが流れてきてるのかな…………?

そうだよ…………。

どうして、好きでもない私と、平氣でキスできるの…………?

その先まで進もうとしてるの?

彼を突っぱねて逃げる事だつて出来るかもしれない。

でも、絶対後悔する…………。

じゃあ、このまま流されれば後悔しないの…………?愛のないこの行為がこの先何になるつていうの…………??

私は答えの出ない自問自答を繰り返していた。

短い時間で重要な選択を迫られてる気がした…………。

彼が、私のシャツのボタンに手をかけたとき、ほんの少しの理性が勝つた。

「い…やつ…!」

私は彼を跳ね除けた…。一瞬空氣が固まる。

「あ、あたし…帰る…!」

私は逃げるよひに部屋から出よひとするが、何事もなかつたよひに学が声を発した。「コート…コート忘れてる…」

彼はハンガーから私のコートを外そつとしてくれていたみたいだつたけど、その余裕さも、私にはなんだかショックだつた…………。

私は彼からコートを奪つよひにして受け取ると、逃げるよひに部屋から出た。

階段を駆け下りると学のお父さんと田が合つ。

私は出来るだけ平静を裝つて学のお父さんに挨拶をし、家から出た。
雪が降り注ぐ寒さも気持ちよく感じた。

自分の気持ちを落ち着けるのに一度いい温度だった。

振り返り、学の家を見つめ、恋が終わったんだな…って自覚した。

私が自分で終わらせてしまったんだなって…

でも、涙は出なかつた…。それが余計に、苦しかつた…

第4話 バイト先の風景

「ほらね？片山は信用できないんだってば！…ひなもわかつたでしょ？」

…分かつた時にはもう遅かつたんだってば…

あれから一週間経つて、ようやく一応、気持ちの整理がついて、唯衣に報告（？）

唯衣といえば、失恋した私を気遣うのもそっちのけで、私に先を越されたのを悔しがっていた…。

「キスってどんな感じ？気持ちよかつた？」

「…………」言われて学の唇の感触が蘇つてきた…

気持ち良くなかったと言えばウソになる。

だけど、気持ちが空っぽのキスがなんになるって言つんだ…。

私は学への気持ちを振り切るようにバイトに打ち込んだ。風邪をひいて朦朧としてもバイトを休もうとは思わなかつた。

「もう、バイトの時間だ…用意しないと…」

私がバイトに打ち込む分唯衣と遊ぶ時間が削られ、唯衣は不服そうだった…。

その日出勤したら、今日から入った新人だという男の人がいた。

私、スーパーのレジ店員をやっています。

今日は、夕方4時から8時までの4時間勤務。

「今日は志摩さんに指導してもらつてください。」

…と、新人を押し付けられた…。

『櫻井』と名札がついている彼は、物覚えが良く手間がかからない人。第一印象はそんなに悪くはなかつた…

午後8時、私と彼はバイトが終わり更衣室で着替えを済ました直後ドアがノックされて私は振り返つた。

ゆっくりとドアを開けて様子を伺いながら正社員の小原さんが入つ

てくる。

小原さんは私のレジ指導をしてくれた人。

「志摩さん…明日から1週間、昼に出勤してくれないかな?…ダメ?」

私は学校にも行つてないし、昼間のバイトもしてないから断る理由なんてなかつた。

私が更衣室から出るのを待つていたかのように新人の彼、櫻井くんが立つていた。

「お疲れ様でした」

なんとも人懐っこい男だ。

今まで接した男の人では珍しいタイプの人だったので多少、面喰らつた。

「家の方向同じなら一緒に帰りませんか?」

つて言うから家の近くまで来たらハイさよならかと思つたら、家までついて来て、喋りのエンジンに火がついたように喋りまくる櫻井くん…。体調が万全ではないので、早く家に入りたいんだけど…

…季節は春…夜ともなると寒い…。しかも風邪引いてるし…。私はなんとか話を終わりに持つていこうと努力した。

「志摩さん…?顔赤いですよ…。」

ようやく櫻井くんが私の様子に気付いた。

「家、出る前から体調悪かつたんだよね…。頭痛いし。」

私がそう言うと櫻井くんは私の額に手を当ててきた…。

実は私、顔に触れられるのにめっぽう弱い。惚れスイッチがあるのか?つてくらい…

しかも今は失恋直後、しかも風邪で弱つてる…。ダメだダメだダメだ!

片山学の事でよおつくわかつた!

…恋愛すると私はダメになる。

私は櫻井くんの素早く振りほどいた。

櫻井くんは私の顔を覗き込んだ。

「志摩さん今日は早く寝た方がいいですよ?すこい熱だし...」

熱で朦朧としているのか、惚れスイッチ触られて動搖しているのか、手を振ると逃げるよにして家に入った。

私…ドキドキしてる…なんか、ヤダ…。

恋してしまいそうな自分がすごくヤダ。

学のときはそんな事考えなかつたのに…

考える間のなく好きになつていつたのに…。

なんですか…?

考えないよつにじてるの?、氣を抜くとすぐ、学の事考えてね…。
考えないよつに意識してゐつて事は、考へてゐのと同じ事で…。私
…まだ…?

私が毎晩のヘルプをするよつになつて、口田の事だった

櫻井くんが家に来た。

「志摩さんとシフト合わないから、志摩さんの顔が見たくなつて…。

」
言われた瞬間、鳥肌が立つた…。

あれ…?

なんで鳥肌…??

普通こんな事言われたら嬉しいんじゃないの?

なんで鳥肌…??

もしかして、惚れスイッチに触れられて動搖したのも、ドキドキし

たのも…恋の予兆なんかなくて…

ただの拒否反応?「僕、1日でも志摩さんの顔見られないと…志摩
さんの事ばっかり考えちゃつて…」

うん……決定的だね……。ダメだ、私。

顔は確かにかっこいいんだけど、マメっていうか…マメすぎて…

二
九
九

個人差はあるにしても、利害はこの辺がキーワード

……そう！『いい人』なだけなのよ！

氣難しい私にはこの位マメな人のほうがいい氣もするけど、…私は

「…………志摩さん？」心こうにあらずの私に気付いたのか櫻井くんは

顔を覗き込んできた。

櫻井くんで彼女いなしの三友通総介しておけよ。が

…よく考えたら、失礼な発言だよな…『女だつたら誰でもいいんで

『...的な』。

う。 いや。 緑がうかれ。 徒然が答へた。 て相手に ないが

力なくそう答える櫻井くん。

う。傷つけた。

ムの謝罪」原作のボーグ・マゼン

「僕は…僕は志摩さんが「ダメ～～～～～！」

お願いだからそこから先は言わないで～ええ～！

れが 私は まだ未練外で… ども でも 徒しやなき
やダメで!! 永井くんは 友達として は最高だ ガガ

何が元彼だよ… 1日しか持たなかつたくせに…

つて突っ込みを入れながら、自分でも信じられないくらい早口で捲

これで、櫻井くんが私の事口説いてるのが勘違いだったら、私はと
んだ笑い種だな… と思いながら…

「そ……そう……ですか。僕の事は考えてもらえない…? 友達…?」

勘違いではなかつたみたいだけど…。

もし、彼の立場だつたらどんなに辛いだろう…? 。

告白もさせてもらえないで失恋…つて。もし、自分がそうなつたら… そつ思つたら謝らずにはいられなくなつた。

「い…ごめんなさい…」

「謝らないでください…」

彼は私に心配かけまいと明るく振舞い力なく去つて行つた…。

私は罪悪感に苛まれながらも自分の気持ちを再認識した。

今更、どうすることもできない相手に…。まだ、未練タラタラなんだと言つ事を。

最近、よく思う事がある…。

勝手だなあ…と。

わがままつて言つたほうがいいのかも知れないけど…

もちろん、私の事。自分勝手な気持ちで相手を傷つけて…。

私は、先日の櫻井くんとのやり取りを深く反省して…。それだけじやない、学の事を忘れられないなんて自分勝手にもほどがある。なんでこんな事考えてるのかな…?

私のバイト先は小さなスーパー。

レジは3台あつて、前から1番レジ、2番レジ、3番レジ。夜8時を過ぎると人が空いてくるので、3番レジを8時に閉めます。

3番レジについてる人も8時でバイト終了です。

で、私、その3番レジにいる…。

今日は開店から夜8時まで勤務する事になつてます。この店シフト

私の場合、無茶が利くから特別なんだうけど…。

この、3番レジ…タバコの棚が後ろにあつて結構狭い。

3番レジにいる人は7時35分くらいにタバコの棚にタバコを補充します。

タバコなんて吸わないし（吸つたらいけない歳だし）、銘柄なんて未だに覚えきれない……

私がタバコの補充に悪戦苦闘していると背後に気配を感じて振り向いた。

私は息を飲み込んだ。

「…………」そこにいたのはガソリンスタンドの制服姿の片山学。向こうも一瞬驚いた表情を見せたが、一言。

「タバコ。マルボロ」

「ま、マルボロ……？？」

名前と箱が一致しないで棚にウロウロ指を指す。

「右の……あ、下の……」と、学がナビしている。

……つて、

「未成年にタバコ売っちゃダメ！」

つて言られてたよな……。

「それ……！」

「これ……？」

学は領き、私にお金を手渡し、私からタバコをさりげて去つていった。

「…………」

あれ……？忘れてた。

この店の隣に学のバイト先があるんだとこりこりとスッカリ。

なんで今まで気付かなかつたのか、なんで今になつて鉢合せたのか不思議だつたけど……

超特売！！

これは、2ヶ月に1回、1週間に渡つて特売を行うウチの店名物（？）イベント。

しかも、今日は日曜。超特売最終日。

店内は異常なまでに混み、レジが3台しかない事を恨めしく思つた。レジには長蛇の列、笑顔がひきつる…。

なんとか客足が落ち着きだしたのは夕方の4時過ぎになつてからだつた。

私はふと、1番レジに並んでいるお客さんに田やつた。
学が彼女と仲良く買い物…という風景。

それには全然驚かなかつたし、ショックでもなかつた。

だつて、彼女がいるんだろーなー…つてなんとなく、わかつてた事だつたし。

でも…ショックだつたのは…その彼女が私の知つているひとだつたから。

ああ…考えてみれば、彼女の家は私の家の近所だつたな…。そつか…私は彼女の家に向かう学を呼び止めて告白したのか…。

そつか、なんだ…そういう事か…。

小さい頃、よく遊んでくれて、面倒見てもらつた。

優しくて、可愛くて、大好きだつた。

憧れだつた、大好きだつた…福井美咲さんが学の彼女だつたんだね…。

憧れていた人が好きな人彼女…。憧れつて言つても昔のことで、今は何の関わりもない人なのに、自分がなんでこんなにショックを受けているのかわからない。

自分に望みなんて1つもない恋、自分で投げ出したのに…。
いや、投げ出す前から…

すでに告白の時点から望みなんてなかつたんだ…。

この恋で幸せになれる選択肢なんてすになかつたんだ…。

私はマヌケな自分にショックを受けていたんだ…。舞い上がりつて、傷ついて、一喜一憂していたバカな女…。

それとも悔しいのかな…?…まだ学を好きな自分を。

自分が情けなくて、惨めで消えててしまいたい!!

そんな気持ちのまま休憩時間になつた。

私は休憩室で一人になつてひとりしきり泣いた。

泣いて泣いて泣き疲れたら気持ちが落ち着いてきた…。

これ以上好きでいてもしかたない…。男なんて他にいくらでもいるしや…。

…そもそも私は恋に無関心だったんだつけ。恋なんてしなくても生きていけるつて思つて生きていた。

実際、恋をして私はダメになつた。

くだらない事で思い悩むようになつた。自分勝手でワガママな物の考えをするようになつたのも恋をしてからじやないか…？

学をあきらめるしかないんだ…

私は自分に言い聞かせていた。

男なら誰でもいいというなら櫻井くんに逃げ込む選択肢もあるだろうけど…

彼に対しての拒否反応が更に強まる出来事があつた…。

彼は私のバイトが休みの日は自転車で私の家の周囲をうろつき、私が家を出るまでそれを続けた…。

家の窓からその行動を初めて見たときは恐怖を感じた…。

そして私を見つけると彼は決まってこう言うのだ：

「志摩さん！偶然ですね！」と…。

偶然じゃないのは明白だし、近所の人も気味悪がつて『ひなちゃん気をつけなさいよ？』って心配されるし、姉ちゃんからも『あいつ近所迷惑だからなんとかしてよ…』って怒られるし…。

なんとかしろつたつてえ……『うすりやいいのか…。いやいや、まいったよ…。

まさか私がスーカー被害（？）に遭おうとは…

私もバイトの休みの日はバイトの事を忘れてゆつくりしたいもん。

櫻井くん、悪気がないのはモチロン知つてるけど…。

「困るの…」真剣に懇願する私に対し、櫻井くんのとぼけること、とぼけること…。

「へ？ なんの事ですか？」

「ついには逆ギレをされる始末…。

「じゃあどうやってバイトに行けって言つんですか！…」ウチの前
通らなくとも道なんていくらでもある。そんな言い訳通用しない！

「…警察…呼ぶよ？近所の人も気味悪がってるし…」

私のこの一言に彼は恐れおののいた…。

その後の切り替えの速さは実に見事なものだった。
友達を紹介すると言う話、散々聞き入れなかつたのに、急に紹介し
ろと言ひ出した。

玲夏が

「彼氏が欲しい！紹介して！」待ち合わせのセッティングをしてあ
げた…。

その後、バイト中の私の元に一人で現れて、幸せそう一人仲良くに
帰つて行つた…。後日、玲夏に

「友達の紹介だからつて、遠慮しなくていいんだよ？断りたかつた
ら断りなつて！」

…と言つてみたところ、玲夏は不思議そうな顔をして、

「え…？ バツチリ好み！」

だそうです…。

私も唯衣も今まで玲夏の好みなど知らなかつたのですが、…蓼食つ
虫も好き好き…

好みは人それぞれなんだなあ…と思つた瞬間なのでした。

第5話 マイペースな男

目の前にバイト先が見える…。

私とバイト先を隔てる大きな道路…。

もう随分待ってる気がするなあ…信号。

「ねえ」

すぐそばで声が聞こえた。私は声のした方を向く。

そこには制服姿の男の子が立っていた。金髪に近い茶髪、制服は着崩し、軽くい印象。

スラッと高い背に整った顔…。

ホント…キレイな男の子だなあ…。

私は声をかけたわけじゃないだろうと思つて、周囲を見回したけど、私以外に人は誰もいなかつた…。

「どうか行かない?」

見た目どおり、軽い感じで軽い事を言つてきた…。

生まれて初めてされたよ…ナンパ。これがナンパ…なのか…??

「いえ、これからバイトなんで行けません。」

我ながらハッキリ断つたつもりなんだけど…

「じゃあ、バイト終わってからならOK?」

「OKなわけないっての!」

私、唯衣からよく

「断り下手」つて怒られてたよなあ…

「バイト終わるの遅いんで、行きません!」

これなら大丈夫か?

彼は少しの間だけ黙り込み、不服そうに言つた。

「…バイトつてどこよ?」

「言つ必要ないし!」

そんな会話をしているうちに歩行者用の信号が青に替わった。

私は大慌てでその変な男から逃げるよう店に入った。

その日のレジも忙しく、出勤前の事なんてすっかり忘れていた。

時刻は8時休憩の時間だ…。

休憩時間は15分。1番レジの人と2番レジの人と交代で休憩をする。

その間、レジは一人だけになる。

混まない時間だから一人でも大丈夫。

「右京くん。8時だよ休憩すれば？」

右京洋和…3週間前に入ってきた新人。

科は違うけど櫻井と同じ学校の生徒なんだって。

悪っぽく見えるんだけど、穏やかな物言いと、かわいらしい顔がそれをカバーしている。ただ、身長が低いのを本人は気にしているが普通にモテると思う。

右京くんはニコッと笑つて会釈して

「じゃあ、休憩行つてきます。混みだしたら呼んでください」

混むわけ…ないとと思うけどね…。

私は笑顔で返すと、右京くんは休憩室へ消えた…。

「ヒ・マだあ…お客さん来ないかなあ…」

そんな時、店の入り口の自動ドアが開いた。変な人が来た。さつきの変なナンパ男。

「こんばんわ～」

「…………いらつしゃいませえ…………」

ハイテンションな男に反してものすごくブルーな私…。ニコニコしながら私の事を見つめているだけの彼。

「…………あの…………なにか？」

私は客か何なのか分からぬ男に露骨な態度に出た。

「なにか?…つて客だよ客」

「商品を持たずレジに来られても困るんですけど…?」

男は私のネームプレートをまじまじと見た。

「志摩さん…か。下の名前は?」

「 言ひ必要ありません」

私は過剰にイラついていた…。

櫻井によつやく彼女ができる解放されたといつのこと、そんな私の事などお構いナシにこの男は私を舐めるように見ていた。

かつこいいのは外見だけ……つて男、最近増えたな…。

「…………ふーん? 細いのに結構胸あんだね」

「 ! ! ! 」

私、この子の会話すぐ苦手。

…つていうか、初対面の相手にいきなり失礼でしょ?? 初対面じゃなくても失礼だと思つけどさ…

「 お、新鮮な反応」

この男は私の反応を見て楽しんでる…。

頼む、もう、帰つてくれ…。

「 アナタ、そんなに女に餓えてるようにも見えないけど… 」 街に出てナンパしなよ。いくらでも女の子がついて来るでしょ?? 「…」

男はまだ、二二二二しながら私を見ている。

「 ナンパした女のバイト先まで押しかけるのがアナタのやりかたなの?? そんな事されたつて私は迷惑です。…帰つてくれませんか? 」

男は感心したように頷きながら帰りつとした。そして立ち止まりこつち言つた。

「 僕、恩田」

その場で振り返りもう一度言つた。

「 … 恩田牧だから。覚えといて」

「 は!? なんで私がアナタの名前覚えてないといけないの? 」

率直な意見だつた。

「 僕とあんた、これから長い付き合いになりそつだから… せ」 そつ言つて恩田という男は帰つていつた…。

「 ワケわかんない…」

なんだか…すごく疲れた…。

塩でも撒きたい気分だつ。

覚えといて？長い付き合いになりそり…だ？？？

櫻井のしぶとさにあつかましさをプラスしたような男…。
まあ、櫻井のような真剣さがない分、まだ楽だけど…。

そのうち飽きて来なくなるといいけど…。

そのうち休憩を終えた右京くんが戻ってきた。

「休憩終わりました。…志摩さん顔色悪いよ？…なんかあつたの？忙しかつた？」

疲れが顔に出てるのか…。

「いーや、なんでもないよ。暇だつたし！じゃ、休憩いただきます」

その後は平和（？）な時間を過ごせた。

閉店して、店内で仕事して、帰るのはいつも大体10時半ぐらいになる。

店の裏口から出て、右京くんと一人、話しながら駐輪場まで歩く。

「へ～右京くんバイク乗つて来てんだ！かつこいい～！」

「志摩さんバイク好き？後ろ乗つてみる？」

「ホント？いいの？？」

…などと言つた愛もない会話をしていた。

そうしてゐうちに駐輪場に着いた。

「今度バイク一緒になる時、歩いておいでよ。送つてくからね」
バイクの後ろに乗つてみたいと思つてたので右京くんの申し出に嬉々として飛びつく私。

「え？マジで？…ホントにいいの？？私、ホントに歩いて来ちゃうよ？」

「うん、全然OKだよ」

…と、そこで私の表情が固まつた。

暗くて全然気が付かなかつたんだけどさ……。この暗い駐輪場に…。

…誰かいる…！！！

「……！」

暗闇から声がする……。

「いや、まいったよ。待つのはいいんだけど、どれがあんたのチャ
リかわからなくてさ……」

私は怯えた。……本気で怯えた。

いくら櫻井でもここまでしなかったから……。恩田は私のもとに歩
いてくる……。

私はゆるつと後ずさりをし、少しずつ、ホントに少しずつ右京くん
の後ろに逃げ込んだ。

その様子に右京くんも察し、一歩前に出る。

「……俺が用なのはキミじゃなくて志摩さんなんだよね。ど・い・
て」

馬鹿にしたように力の抜けた声で話す恩田に対し、

「その、志摩さんが嫌がってんだよ」

普段の穏やかな口調とは違い、荒々しい口調で右京くんは言い放つ
た。

恩田は突然右京くんの頭を撫でようとし……私の頭を撫でた。
右京くん越しに……

「キミつてちつちやいんだねえ……。いくら志摩さんの前に立つても
キミ越しに口向に触れちゃったよ?」

あ、それ禁句でしょ……。身体的なところを突くのは汚いよ……。

私は恐る恐る右京くんの顔色を窺つた……。

眼鏡の奥の目がギラギラ殺氣立つている……。やつややつだよ……。

「……やけんなゴルア……」

右京くんは素早く、力強く恩田の胸ぐらを掴んだ。
あわわわわわわ……

普段おとなしい子が怒ると怖いってホントだな……。

私はパニックでその後の事は覚えていない……。

多分、恩田が持ち前のペースで右京くんをなだめたんだと思つ……。
私、最近思うんだ。

生きてる人間の方が幽霊より何倍も怖い……と。

いろんな意味でね……

バイトに没頭する日々はまだ続いている……。

9時10分……

もうすぐ、現れる時間だ……。

私はヤツを待ちわびてる……？？

入り口の自動ドアが開く音がすると私の胸はドクンと音を立てた。

……ヤツが来た。

ガソリンスタンドの制服に身を包み、一万円札数枚を手にしている片山学が……。

私はすぐさまレジから逃走し、商品棚の商品を整頓する仕事を始めた……。

この作業を『品出し』……という。レジを見ると櫻井が千円札の束を数えていて、学がそれを待っていた。

ガソリンスタンドでは万札を出すお客様が多いらしく、千円札が不足するらしい……だからウチの店に数万円分の千円札を両替しに来るんだ……。

両替に来る店員は日々よつて違つけど、圧倒的に学が来る事が多い。私は賞味期限をチェックしながら、お客様が取りやすいように商品を並べる。

作業を終え、レジに戻ると櫻井が不服そうに私を見る。

「何よう？」

「なんで志摩さんが相手しないんですかあ？」

櫻井は私が学の事を好きなことをナゼか知っていた。

でも、あきらめようとしてる事までは知らないみたいだ。

「……相手ってなによ？ ただの両替でしょお？ 誰がやつたつていっしょじやん」

「じゃあ品出したって誰がやつても一緒じゃないですか！」

……

彼女が出来た途端態度でかくね????

…こや、別にいいんだけどさ、猫…かぶつてたんだなあ。って思つてさ。恋愛で猫かぶるのは女だけじゃないんだな…と。

「ハイハイ。今度からちゃんと両替もしますよ。…つていうか私やつてんじゃん、両替。」

「あの人じゃない店員の時は…ね。照れ隠しにしては露骨過ぎますよ…」

言いながら怒つている櫻井。

私が学を避けてるのは露骨な照れ隠しだと思つているらしい。これ以上この話を長引かせたくなかったので違う話を振つてみる。

「…あんた玲夏とうまくじつてないの?」「順風満帆ツスよ…」

自分の恋愛話になると急に上機嫌になる…。ああ、こいつがバカでよかつた。

その後5分櫻井は玲夏がいかにかわいくて、優しいかを延々と話しつづけ、自分のレジを閉めるまでずっと上機嫌だった。

9時35分。1番レジ、レジ締め。

もう混む心配はないけど、お客様さんは来るので2番レジは店の玄関の鍵を閉めて、お客様さんがもう来ない状態になつてからレジを締める。私がレジ締めをしている間、1番レジの人間はモップで床掃除。床掃除が終わつたら先に帰つてもいいんだけど、先に帰つたヤツはまだいない。

2番レジもレジ締め終了して、やつと帰れる…。

店の裏口から出て、駐輪場に向かつた。

「今日も玲夏に会いに行くんですょ…」

「あー…そうかいそうかい」

とりあえず玲夏を大事にしているのがわかつて安心したよ…。玲夏も

「毎日会いに来てくれるんだ」…つて、嬉しそうに話してたし…。この一人はしばらく安泰だな…。

そつ思いながら駐輪場に行くと、ああ…やつぱりいた。

「よお…」

『よお…』…じゅ…なによ…

櫻井は不思議そうに恩田を見、私に訊ねる

「知り合いですか？」

私はどんよりと言つた。

「つづん、こんなひとしらない

恩田はおどけながら私に言つた。

「そりやないんじやない？ひなたけやーん

「……んな！？」

教えたはずのない下の名前を馴れ馴れしく呼ばれ動搖した。

「ああ…知り合いと待ち合わせしてたんですか…じゃあ僕はこれから玲夏の所に行くんで。じゃあ…！」

櫻井は勝手に自分なりの解釈をして大急ぎで嬉しそうに自転車をこいで行つた。

薄情者……。

「あ～…行つちゃつたねえ…。今日は簡単でよかつたわ」嬉しそうに恩田は言つた。

なんか…。バイトは楽しいのに、バイト…辞めたくなつてきた…。

「ね、もういい加減にしてくれない…？なんでこんな事すんの？キミ、モテそうな顔してるし、その気になればいくらでも…」

私がそこまで言つと、彼は真面目な顔をした。

「もう飽きた。…なびかない女を手に入れたい。」

う～～～わ～～～今時そんな事言うヤツいるか！？

私の事など、お構いナシに恩田は話を続ける。

「今まで付き合つてきた女はどれもアホばっかだ。どいつも…」
「…つも…」

「私だつてアホだよ。…恋愛に関してはみんなアホになるもんなんじやないの？」

意見する私を一瞥してどこか遠くを見つめた。

「片山は？…あいつはつまく立ち回つてるじゃないか…フン…あいつはアホになるほどマジな恋愛してないからかも知れないけどな…」
「…」

いきなり学の名前を出され驚いたけど、そういえば初めてこいつに会った時、制服着てたっけ…？学の家にも同じ制服があつたな… 同級生なのか？

……いや、違う…

こいつが学を知ってるなんて学校が同じなら当たり前だし…。そんな事で驚いたんじゃない…

私が学を知ってる事を、なんでこいつが知ってる…？

「…なんなの？あんた…？怖いよ…」

「あなたのバイト先に俺の友達がいて、そいつに聞いた。」

「……」

思い当たるフシがなくもなかつた…。

私の休憩中、3番レジにいた宮元佳織が帰り支度をしていた。私、ちょっと苦手…。それは彼女も同じだろう。私達は必要最低限の話しかしなかった。仲が悪い…とか、そんなんじやなくて。…それが、急に彼女から話しかけてきた事が一度だけあつた。

「志摩さんて彼氏とか、いる？」

彼女から話しかけてきたこと自体ビックリしたのに彼女の口から仕事とは関係ない話が出てくるなんて思つてなかつたから…

「へ…？ いないよ？」

「紹介して欲しいって言つてる友達がいるんだけどさ、会つてみない？」

一瞬だけ、学の顔がちらついた。それを察したかのように彼女は

「好きな人、いる？」

「あああ！違うの！那人、彼女いるし、あきらめなきやつて…でも、まだなんていうか忘れる事に専念するのに必死つていうか」

私は一人で動搖し、必死に弁解していた。

「那人つてさ…片山？」

彼女の口から彼の名が出て パニック+パニック=冷静 になつて

「あたし、クラス違うけど友達だよ。協力してあげようか?」

「あの…、誰がそんなこと?」

「ん…? 志摩さんが片山の事、好きなのを?… 櫻井が得意げに話してたよ」

じゃあなんで櫻井とそんな話を…? ?

… つて聞こうと思つたけど… もう疲れた…。

「彼女がいるつて事はあきらめる理由にはならないと思つよ…? あいつ彼女『何人も』いるし…」

… つて会話がこの男に筒抜けだつたつて事か…。ウカツ…。この男、何を企んでいるんだろう…? ?

これから先自分がどうなるのか例えようのない不安に押しつぶされそうだった…。

第6話 不信

「志摩さん？」

人に呼び止められる事にさえも、私は怯えていた。

恩田の

「なびかない女だから手に入れたい」

という話なんて信じられない。

恩田が私にまとわりつく本当の理由がわからないうちは……私は安らげない。

唯衣も自分の学校で忙しいみたいだし、玲夏も……

他の友達も彼氏とラブラブだつたり、バス乗り継ぎする程遠くに住んでたり……

だから、誰にも相談できずにいた。

「大丈夫？」右京くんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「あ……うん、大丈夫」

全然大丈夫なんかじゃなかつた。

……ただ、右京くんとバイトが一緒の日は安心できた。

恩田があつたり身を引いてくれるから……。

「右京くん今日はバイクじゃなかつたんだよね？私自転車で来たから。」

「俺？今日は自転車……だけど送つてくれよ。」

そう、最近右京くんは家のすぐそばまで送つてくれている。

「……まだ、あいつ、つきまとつてくる？警察、通報した方がいいんじゃない？」

……警察、そんな方法をすっかり忘れていた。

「右京くん……いつもありがとね？そつか……警察かあ……その手があつたかあ……」

「あの、さ。『くん』付けやめてくれる？なんかさ……ガラじゃな

いし。右京でいいよ」

「あ……そり？うん。わかった！気をつけてみるね」

人間不信の中、右京だけは少しだけ信じられた。

その帰り、いつものように恩田は駐輪場で待ち伏せしてて、右京を見るなり

「なんだ今日はおめえかよ……あのアホじゃなかつたんだな……めんどうくせ」

アホ 櫻井：

まあ……否定はしないけど……

右京は何も言わずに恩田を凝視している……。そしてなにを思ったのか……

「おれたち、つきあつてるんだ！」
……とんでもないことを口走った。

「…………」

バレバレのウソに私が一番驚いたかも知れない……

「ブツ……」これらきれずに恩田が吹き出す

「嘘なら嘘で、もつとまともなウソつけよチビスケーーーにが付き合つてるだ。」

そりや～……いかにもバレバレの大嘘で、笑えるかもしれない……。

でも、なにもそこまでバカにする事ないじゃない！

右京は右京なりに私を助ける方法考えてくれてるんだから……その気持ち少し嬉しいもん！！！

なんだか悔しくなった……。ムキになりたくなつた。

「本當だもん！私達、付き合う事にしたんだもん」

右京のウソに乗つてみる事にした……。

悪ノリじゃない、至つて真剣だった……。

付き合つてもいいかもつてちょっと思つちゃつてる……

もちろん、右京さえよければ……ね。

「ねこおこ、ひなた、何悪ノコしてんだよ～…？」

くうう……端整な顔を歪ませて大笑いしてやがる……。

やがて笑いつかれたのか笑つのをやめ、一息ついていた言に出した。

え、マジで！？ わかっても、信してまで、諦めてやるよ。

「二人のアガルブのちゅー見せとよ。そしたら田舎の事諦めるよ」

何の脈略もない事を言い出す恩田に私は真面目こうひうたえた。

「ひなた、なんでそんなこいついたえてるんだ?」

恩田は意地悪く笑つた。おまえが変な事を言つからだろ？――

右京は固執している……。

つねがうナイスな言い訳である。

「おお、じゃあ、なおさらいいじやん一人のファーストキスの立

カノボウの壽司

「…ったく、キスキスって、うつきいなー…」

どこかで声がする…。ここにいる3人のものではない声…

よく見ると人懸か近いのであたし…女子高生…

「お世話になりました。」あんじあん電話が張りいちつて。

いや、待つてませんが……。

……こていうが誰？

「あー……あなたが志摩ちゃんね?」

そして私の体を舐めるように見回した。

「」

なんだつけ……？前にもこんな事があつたような
彼ではなくラリイ語つー。

「56点」

……は！？

「スタイル？？そ、それとも顔か？どつちみち微妙な点数…
「胸がな…ま、あたしも人の事言えないけど…。学はペチャパイ
の方が好きなんだよねー」

体をジロジロ見られ、点数までつけられ…。

56点……て……自信あつたのに……って違うわつ！

「あー、あたし、森繁麻美でっす。よろしくね！
よ、よろしく……？」

彼女は構わぬ続ける。

「あ、眼鏡の彼はもう帰つていよい。あたしは志摩ちゃんに用があるだけなの」

右京はきょとんとして、私の様子を窺つている…。

恩田と二人きりなら怖いけど、この子がいるなら大丈夫…かな…？
いつまでも右京をこんな事につきあわせても悪いし…

「右京…。帰つて、いいよ。ごめんね」

「大丈夫？」

私と右京の会話に入つてくる麻美さん…。

「大丈夫、大丈夫！あたしが何かすると思つてんの？もう、ホラ、
ほら！帰つた帰つた！」

麻美さんは右京が帰るまで『ホラ、ほら！』と威嚇（？）していた。
そして右京が帰るのを見届けると私に向き直り笑つた。

「……ふう…。さ、邪魔者はいなくなつた事だし、お話しよ…」

『お話しよ…』って言われても…

アナタが何物なのか私にはさつぱり…。

戸惑つてる私に苦笑気味で恩田は言つ。

「俺の元カノ。…んで学の彼女。俺の事フツて学に乗り換えたの
「え？え？？」

学の彼女は福井さんで…。

んで、この人が学の彼女で？？？
んんつ？？？

混乱している私を恩田は呆れた顔で見て、言った。

「だーかーらー、言つただろ？ あいつには何人も女がいるんだってばー！」

「分からぬ事が多すぎて… 何をビヂウ言つたらいいのか…

「まだ信用してねーって感じだな。おまえいい加減にしろよ？」「

「百歩譲つて、麻美…さんが学の彼女だつたとして、それがどうかしたの？ 私に何の関係もない事でしょ？」「

聞きたい事はまだ止まらない…。

「そもそも恩田君はなんで私に付きまとうの？？ 目的は何…？ 学の事あきらめさせたいの？させたくないの？どっちよー…？」「

モヤモヤをぶちまけてちょっと、スッキリした…

「まあ、どうでもいいけど、俺の事は『牧』って呼び捨てにしてくれていいから…」

「あたしもー！『麻美』って呼んで！」

どうでもいいって何よー…人の話を受け流して、自分の言いたい事ばっか…。

今日までの私のストレスそっちのけで『呼び捨てでいいよ』『だ…？？？

「ほ、ほら、牧…志摩ちゃんが殺氣立つてるよー…」

「待て、焦るなって！じっくり順を追つて話すから…。」「

二人で私をなんとかなだめ、私を落ち着かせたところで牧はゆつくりと話し始めた…

今までの行動の意味や、私が不審に思つてた事全部…。まあ、それが全部信用できるかどうかは別として…。

「俺、さ…結構前からあなたの事知つてたんだ。」

「いつから？」「

「あんたが昼間バイトしてた時から」

「昼間のバイト…？ 今の店のレジ訓練期間の時だらうか？

「1年くらい前だつたかな？『見習い』って名札つけてレジやつてた時から」「

あー……やつぱり……。レジ訓練期間の頃だ。

……つて……そんな前から?

そんな前から目付けてたのに、何で今更……?

「正直、タイプ。……て思つてた。だから富元にそれとなく聞いてもらつた……。」

たしかに、富元さん……紹介して欲しいって言つてたの友達がいるつて言つてたっけ……?

「彼氏がいるとか言つんなら……紹介してもらつてもしようがないからな……好きな男がいるつて言われても振り向かせるのは、面倒だし……」

牧はため息をつきながら遠くを見つめた。

麻美ちゃんはそんな牧に話の続きをうながした。

「じゃ、なんで志摩ちゃんに執着してんのさ? 志摩ちゃんは学の事好きなんだつて富元から聞いたんでしょ?」

「だからだよ。……日向が学のことを好きだからだ。」

……私が学の事を好きだつたらなんだつちゅうの? ???

「ああ……だから何だ……? つて顔だな?」

私つて顔に出るタイプ……

「俺、一応は学の友達つて事になつてるけど、キライなんだよ。あいつ……あの女にだらしない所が特に! ……ま、俺も人の事は言えなけどさ……やり方が汚いんだよ……。……気に入つてる女があいつの毒牙にかかるのはイヤだ……と」

毒牙…… ??

バカにするように私は言つた。

「かかるわけないじゃん、そんなの。今までならあつたかもしけないけど、私はもうあきらめたんだからね~だ!!」
でも……顔を見たらまた好きに可能性はなくはない……。
仕方ない……と言つた風なため息をつきながら牧は言つた。

「あいつ……ガツ」口で『食い損ねた女が俺のバイト先の隣の店でバイトしてた』って言つてたの聞いたんだよ」

「私は、食い損ねた女……ね……」

まあ、あつてるけどさ……。

「学つて……思つたよりおしゃべりだつたんだ……」

いや、それ以前に私の事を知らない人間にそんな事話して何になる

?????

いや、私の事を知らない人間だから話せるのか……？

「何が楽しいんだろう？」

「普通、そんな事話して何になるつて思つだろ……？」

牧の問いに私は興味津々と頷いた。

「あいつだつて、興味のない女の話なんてしねーよ……。あいつの口から女の話なんて久しづりに聞いたくらいだ……。」

反論しようとして牧に言葉を遮られる。

「あいつはあんたを狙つてる。それは間違いないって……チャンスがあればいつだつてそのつもりなんだ……誰がさせるかよ……」

そんな……そんな取り越し苦労で今まで私につきまとつてたの……？

そんなことで……？

「あ、？あんたにつきまとつてた理由？最初から言つてるじゃん。あんたが俺のタイプだつたから。その上、学が狙つてる女だから。以上。」

この人、思い込みが激しいのか、人の話全然聞かないよね……
学が私を狙つてる……????

バカか？

ありえない妄想だ……。

しばらく黙つていた麻美ちゃんがポツリとつぶやいた。

「チャンスがあれば、いつだつて……かあ……」

勝手に思い詰めてる牧が返事をする。

「おう、絶対、邪魔してやる……」

どうからどう聞いてもイヤな響きだな……

いまいち釈然としない説明に納得しきれなかつたけど、そのうち飽きて、関わつてこなくなるだろつ……つて……私は甘く考えていたんだ

第7話 激情

「あ、れ…？」

今日のバイトは櫻井のシフトだったはずなんだけど…。

「なんで右京がいるの？」

右京が呆れ顔で言う。

「生徒会が長引いて、今日もバイトを変わって欲しいんだつてさ」

またかよ…。

確かに、櫻井は学校で生徒会長をやっているらしいのだが、最近は『生徒会が長引いて…』を常用し、他の人間の休みを貪り、バイトをさぼっていた…。理由はわかってる…。

女に溺れている…。玲夏とイチャつぐのに夢中で、バイトどころではない…と言つた様子。

大体、私が休みの日は私が被害に遭うのだが、私は最近、休みなくバイトに出ているため、最近は右京が被害に遭っている…。

「まあ、俺はいいんだけどね…」

右京は笑つて言つてるけど疲れてるよつに見える…。ホントに櫻井には困つたもんだ…。

右京の休憩中、麻美ちゃんが買い物に来た。

「こんばんわ！」

明るくて良い子だ…。

「志摩ちゃん、携帯持つてる?」

「受け専だけね」

私は商品をレジに通しながら答えた。

「教えて！」

その返事には困つた。

なんていうか…

バイトの時だけじゃなくそれ以外の時間まで踏み込まれそ�で…。

「牧には教えないよ。お願い！あたし、志摩ちゃんと友達になりたいだけだもん！！」

『友達』…この響きに一瞬揺らいだけど、学と関係のある、いかなる人間とも関わりを持ちたくなかった。ようやく吹つ切る事がでそうなのに…。ふと、顔を見ると田をウルウルさせて見つめてくる…。かつ、かわいい…。

女の私が思うんだ。…こんな彼女を取られた牧はさぞかし学を恨んだ事だらう…。彼女が自分を振つて学に行つたつて事なら尚更だ…。

「ねーねー…！お願ーいつ。志摩ちゃんの嫌がる事しないから…それとも志摩ちゃん、麻美の事…嫌いなの？？」

「……」

計算か、天然かはわからないが、ホントに…かわいいと思つた。結局負けて、携帯の番号を教える事になつた…。

「牧には教えないで。あと、仕事中は出られない。あと…夜中も勘弁してね…」

麻美ちゃんは真剣な顔をして頷く。

「わかつた！牧にも教えないし、バイト中や、夜中もかけないよ…」悪い子には思えなかつたので信用する事にした。

麻美ちゃんは会計済みの商品を袋に詰め終えて、私に向き直りつぶつ。

「じゃーね！また後でー！」

と言つて帰つていつた…。

ん…？後で？？

「ただいま。忙しくなかつた？」

右京が休憩から戻り言つた。

「全然。…んじゃ、私休憩もひつね」

安らぎや、楽しい時間はあつという間にすざめるもの…。

15分休憩なんて、一瞬みたいなもんだ。

…私の休憩が終わるとなにやら牧が右京と話していた。

「…………？」

見たところ牧が右京をからかっていて、右京がムキになつているつてところか…？

牧は遠田から私に気付くと笑顔のまま帰つていった。私はそのままタバコの売り上げの集計をとるため事務所へ向かい、レジに戻る途中、右京の様子をうかがつた。顔が真っ赤だ

「ど、どうしたの？ 右京、顔真っ赤…トマトだ。」

「う…え…ああ？」

右京はうろたえている…。

「…………牧が何か言つたんでしょ…？ …何言つてたの？」

右京がここまでうろたえるんだ、よっぽどの事を言われたに違いない！

私は右京を聞いただす。しかし、右京は…

「いや、うん。なんでも、ないよ…うん」

あからさまに怪しい態度で『何でもない』と言い張るのであつた…。バイト終了後、今日もいつものように駐輪場にいるのだろうと思つていたのだが、今日は誰もいない…。

「…………」

「ホントに解決したんだね。」

右京の様子も落ち着いていたので私は再び聞いてみる事にした。

「右京…ま…恩田君、右京に何て言つてたの？ ある事ない事言われても困るし…。それとも私と関係ない事？…だつたら私は何も聞かないけど…」

「うん…大丈夫。大丈夫。」

…。その話題に触れると右京は変になる…。

だから、その話題には触れない事にしよう…気になるけど…。家に帰り、携帯を見ると、着信アリだつた。

3件…。そのうちの2件は留守電が入つていた。

『ひなう？ 唯衣だよ！ あたし、瀬戸君と夏祭り行く約束しちゃつ

た！えへへ～それだけ！がちゃ シー…シー…』
もう一件の留守電を聞こうとしたところで電話が鳴り、通話ボタン
を押した。

「はい…もしもし？」

『もしもし』

だれ？男の声だ…。牧…？

「…………？」

私はものすごく警戒した声でやつて言つた。

『…………片山だけど。』

…………は？

「…………」

『バイクのシートに番号書いたメモ紙あつたから電話したんだけど
…………？』

バイクのシートに私の携帯番号を書いたメモ紙が…………？？

私じゃないです私じゃないです私じゃないんです！

「メモ紙には…何て？」

恐る恐る聞いてみた。

棒読みで学は答えた。

『私の携帯番号です。さみしかつたらかけてきてもいいよ。志摩曰
向ヨリ。』

あいつだ～～～～～！

私は妙に冷静に学に言った。

「…………。それ、私じゃないから。番号は私のだけど…犯人分かつて
るし…メモ紙…捨ててくれていいから。」

そう言つと、学の返事を待たずに電話を切つた。そして、残りの留
守電を聞いてみる事にした…。

『やつほ～志摩ちゃん元気～？？あたし、学に志摩ちゃんの携帯番
号教えといたからねつ。牧には教えるなつて言つてたけど、学には
教えるなつて言われなかつたし…。電話一、かかつてくるとい

ね……！……』

じゃね！……

じゃ、ないよ！……

すつ“”ビックリした！すつ“”緊張した！すつ“”……

ドキドキした……？

「なんでこんなことするかなー……」

やつと学の事を考えなくとも楽しい日常になつたのに…吹っ切る事が出来たのに…。なんで邪魔すんのかな…？
怒つてゐるはずなのに…完全に怒りきる事が出来ない私だつた……。

翌日、私は久々の休みで、家でくつろぎモードだつた……。

そんな時電話が鳴つた。

「あーもーー櫻井からじやないだらうなー！」

苛立ちながら電話に出た。

考えてみたら今は夕方の6時半。

バイトの交代ならもつと早く電話が来るはずだ。

『……片山だけど

「…………はい？？？」

思わぬ人からの電話で拍子抜けした。

「え、え？な、なんで、え？なに？？」

あからさまに動搖してゐる私に構うことなく学は続けた。

『今日、バイト休みだから、会わない？…ああ…そっちがバイトか

……』

「…………え？今から？」「

『いや、無理にとは言わないけど……』

この人つて、聞き返すと引き下がるんだよな…。これもテクニックの一つなんだろ？…？引き下がられると『あ、別に無理じゃない

し』って言いたくなる』……

『いいけど、どこだ……？』

私にだつて学習能力はある。』の前と同じような過ちは犯したくない。

すると学は警戒する私を察つしたかのようこクスッと笑い言つた。
『ウチがいやなら外で会おつか。…ウチの近くの公園とか…ウチ覚えてる？』

『なんとなく…そういうえば、近くに大きな公園あつたよね…？』
『そこ…ベンチ。野球場じゃなくて、公衆トイレのところ…』

公園か…健全なデート（？）…とも言えなくはない…

「わかった。今から行く。」

やつ言つて電話を切つた。

公園に向かうと約束のベンチに学は座つていて。

私は近くに自転車を止め、学のそばまで歩いていつた。

「…………」

学は無言でタバコを吸いながら自分の隣に座るよう促した。

「……。なにか、用だった？」

あまりにも態度の悪い学に、イラだつて私は聞いた。

「別に、ヒマだつたから…」

そか…ヒマだつたんだー…。…………つてふざけんなよ…

「タバコ…未成年のうちから吸つと身長止まるんだつて…。あと、

依存性が高まつてなかなかやめられなくなるらしいよ…？』

私が言つと、学は不愉快そうにタバコを近くの灰皿に捨てた。

お願ひだから…

機嫌が悪い時に呼び出すのやめてくれない…？

他の女だつたら体で慰めるとか他に方法はあるのかもしけないけど
そ…

私に何を求めてんのよ…どいつもこいつも…………

イライラがピークに差し掛かった時、学が口を開いた。

「俺の事、まだ好きなの？」

「…………」

何を自意識過剰な事を……って言いたかった。…言えなかつた。悔しいけど…『わからな』って言つのが一番正しかつた。

「わからない…」

私のその答えに不服そうに聞きなおした。

「『わからな』…？自分の気持ちなのに？？」

『気持ち』…学の口から聞くと妙な響きだ…。

私が口を開けた時、学の携帯がなつた…。

学は躊躇する事もなく電話に出た。

「…………。ん、うん、わかつたいよ。ん、じゅ」

「…………」

『ちよつと』『めん』とかさあ…ないのか？普通…。

電話を切ると学は私の方を向き、いつ言つた。

「じゅ、俺帰るわ。」

は？なにそれ…。とも思つたけど、話の内容がすぐに推測できた。

「…彼女、来るの？」

「まあね。」

悪びれもせずに言つ彼に胸が痛かつた…。

「もしかして、私つて…彼女が来るまでの暇つぶし…？」

「…ああ」

ここまでバカにされて、それでもまだ好きだなんて…私が言つてでも思つてはいるんだろうか…？悔しこよ…泣けるほどくしゃじょ…

「行か、ないで…」

こんなヤツ…大嫌いなのに、まだ好きだなんて…

「行かないで…私と、いて…」

なんでこんなこと、自分の口からスラスラ言えるのか不思議だった。急に試してみたくなつたのかもしれない…

少し、戸惑つたように学は振り向いた。

「お願い、一緒にいて。おねがい……！」

胸が、痛いくらいドキドキして、足が震えて、頭がクラクラする…。学はなんて応えるだろ？…？？

「好きなの…あきらめようつて何度も思つたけど、思つたのに…」学が私に向かつて歩いてくる。そして私の前で立ち止まり、ひづ言つた。「いいよ…うん…キミと一緒にいても…」

さつきまでと違い、優しく口調だつた。雪の中、告白した時みたいに優しい感じだつた…。

けど…すぐに田つきが変わつて…

「今すぐここで俺に抱かれたらね」

天国から地獄に突き落とされた氣分つて言つたらわかりやすいのかな…？

悪意のこもつた学の田…。

安心した途端、どん底に突き落とされたみたいな。

何を言つているのか全く理解できなくて…

「は？」

つて感じだつた…。

そんな気だつて、全然ないくせに…。最低、最悪。私も私、こんな男、彼女の所へ早く行かせればいいのに…どうして？

煮え切らない私に、学の顔色が変わつた…。

学は素早く周囲を見渡し、私を公衆トイレへ連れ込んだ。

私の肩を壁に押し付け、感情的にシャツのボタンを剥いだ。

「い…っ、や！」

ボタンが弾け飛び、パラパラと床に落ちた…。

「俺の事が好きだ…？一緒にいたい…？こんな風に…乱暴に扱われてもかよ…？いま、ここで、俺に犯されても同じ事が言えるのか…？」

？」

こんな…感情的になつた学を初めて見た。

怖い…というより、不思議だった…学がどうして怒つているのか、どうしてこんなに感情的になるのかわからなかつた。

「…抵抗しろよ…、逃げてみろよ…前にしたみたいに、逃げてみろよ…！」

私の胸を乱暴に押さえた学の手が、微かに震えてる…？

「お前…と…る…イラ…ラ…する…ん…だ…よ…！」

学が私から手を離し、逃げるように去つて行つた…。

私は、今起こつた事が飲み込めなくて呆然としていた…。トイレから出ると、外はもうすっかり暗くなつていた…。夜風にさらされて、ようやく、現実に引き戻された。

シャツのボタンは飛んで半分以上ない…。

震えが止まらなかつた…。私、何が悪かつた…？

私…私は…？

「日向？」

すぐ近くで自転車のブレーーキ音が聞こえた。

私は肩をすくめて声のした方を向いた。牧だ…。

「おー…やつぱり、人違いだつたらどうしようかと思つた。麻美ん家の帰りだつたんだ。麻美ん家こじらへんでさ…」

牧はそう言しながら近づいてくる…

「いや…来ないで…！」

こんな姿誰にも見られたくなかった…。ベンチに座りつづくまつた。

「日向…？どうした…？」

牧は構わず近づいてくる…。

「なんでもいいから、来ちゃいやあ…来ないでえ…っ

牧は私の前に滑り込んで來た。そしてすぐに私の異変に気が付いた。牧は私の肩に手を置き、なだめるように訊ねてきた。

「日向…。どうした…？」

すぐに私の異変に気付き牧に訊ねた。

「それ……誰にやられた？知らないやつか？……知ってるやつか？誰が……こんな事……？まさか……つ！あいつか？……なあつ！」

私はただひたすら首を横に振った。

「私がバカだつた、何もかも、私が悪い、誰も悪くない、私が馬鹿なの……つ！」

牧はそれ以上私を問い合わせる事をせず、私の両肩をなだめるように叩くと自分の着ていた服を脱ぎ、私に手渡した。

「着な。その格好じゃ危ないから」

そう言うと牧はどこかへ走つて行つた。

そして、すぐにもどつてきた。

「ほい」

見上げると缶コーヒーを差し出す牧の姿。

「あり、がと……」

牧は私の隣に座り、自分の缶コーヒーのふたを開けた。

私は一息つくと呆れたように言つた。

「私つて……なーにやつても空回り……一人相撲……情けないよ……」

「俺だつて空回りで一人相撲だ。」

牧が立ち上がり、おどけて言つた。

「じゃあ空回り同士つきあうつか？」

「……」

一瞬その場の空気が固まつた。

私は愛想笑いを浮かべた。

牧が、我に返りあわてて言つた。

「い、ごめん！俺、こんな時に、こんな冗談……つ、ごめん」

私も立ち上がり、慌てる牧にゆっくりと首を横に振り、牧を見た。
「わかつたでしょ？あいつは私を狙つてなんていなかつたつて。だから、牧が私に近づく理由もなくなつたわけで……」

イヤつてくらいわかつた。私はこんなに学に嫌われてたんだつて事……
私は慌てて牧に背を向けた。

男なんか…恋愛なんてしなくとも今まで平氣で生きてたのに…恋愛なんか…いい事なんて一個もないよ…」

「日向…我慢するくらいなら泣けよ…。」

背後から心配そうに語りかける牧に対し私は思いつきり首を振つた。「やだ！絶対泣かない！私は恋愛なんかで絶対泣かない！」

言つた後で胸がカーッと熱くなつて、言いようのない悲しさが襲つてきて、牧にハツ当たりしたくなつた…。

「なんですよ…。なんで優しくするのよ…いつもばバカにするくせに…！」こんな時だけ優しくしないでよ…。」

そう言って、私は両耳を塞いだ。

優しい声も何もかも聞きたくなかった。

牧は私の正面にゆつくつと立ち、おもむろに私の頬を撫でた。

顔が…熱くなる…。

そのまま、手を頬に当てて私を見つめた牧は今まで見た事もない表情をしていた…。

慈しむような…そんな顔…私はその顔に見とれてしまつた…ゆつくりと牧の顔が傾き、私の唇に牧の唇が触れた。

イヤだとは感じなかつた…。

私は、牧の唇を受け入れていた…。牧は私を抱き寄せ、唇が強く触れても牧を突き放そうとは考えなかつた。

それが、恋なんかじやなくて、甘えなんだとわかつていながら…

第8話 ピンクなお誘い？？？

『学をあきらめるハーツ？』

バイト前に、唯衣から電話が来て、最近あつた事を話していた。

「…結構な事じやないか…」

だつたら大声で怒鳴らないでくれ…。

止めたりはしないわけね…？止めて欲しいわけじやないけど。

昨日の事は話さなかつた。…話が長くなりそつだし、なんか怒られ

そつだから…

『しつかし、どうこう心境の変化？新しい男でもできたか…？』どうしてそういう風に持つて行きたがるかな…？

私は呆れて言つた。

「別に恋愛なんてしなくたつて生きていけるでしょ？恋愛なんてもー、うーんやつ」

…私が言つと唯衣の声が暗くなる…

『いかんなー…まだ18なのにそんなオバハンみたいな事を言つちやー…』

「ど、とにかくそういう事なんで、これからバイトなんで、この辺でー！」私は慌てて電話を切つた。

また男を紹介するー…なんて言われたらかなわないもん…。

今日のバイトは櫻井と。か…またのろけ話聞かされると思つたら…行きたくないなー…

行かないワケにはいかないので行くけど…。

「お……？」

またかよ……

「今日も右京なの？…またか昨日も？」

「いや、昨日は俺、元々出番だったから…。富元が替わりに出てた。

「ふー…ん…」

「なんか…昨日、富元が店長に直訴してたけど…」

『生徒会』を口実には通用しなくなつてきますなー…

「いや、今日は『母親が風邪引いて家の事しないといけないから…』と

「右京…断りなよ…。ウソなのバレバレじゃん…」

右京は無言で二口二口しているだけだ…。怒る元気もない様子…。不憫だ…。

考えてみれば私は昨日休んだけど、右京は今日休みだつたはずで…。私よりも出番が多いつて事だよね…？大丈夫かな…？しかも今日は結構混んでるし…。忙しくても、疲れてても笑顔！口レ鉄則…。

1時間くらい経つてもレジは混んだままだ…。

「いりつしゃいま…せ」

学の彼女の福井さんが今日はお友達とお買い物…。

心なしか、視線が痛いんですけど…。

何故か福井さんより友達の視線のが痛いような気がする…。そんな風に思うのは、やましい事があるからだろうか…？

…やましい…？どこが？私は悪くない…と心の中でキレてみる…。

「ありがとうございました。またお越しくださいませ！」

極力笑顔で接したけど、顔が引きつってるのが自分で分かつた…。

ふ…一気に疲れたよ…。

「なんか、一気に空いたねー…」

時計を見ると8時15分。

「休憩、行つてきていいッスか…？」

右京が力なく振り向く…。その顔にいつもの爽やかさはなく、私はひたすら頷くしかできなかつた。

「い、いりつらつしゃい…」

私の休憩もあげたいくらいだよ…

フラフラと売り場をウロつき、食べ物を買って休憩室へと歩いていった…。

大丈夫かな…？

15分後、私の心配をよそに右京は元気に戻ってきた。

「志摩さん、休憩どうぞ」

男子子はタフだな…とか思いながら私は食べ物を手に取りレジに向かった。

「いらっしゃいませ」

の右京の挨拶に会釈をして商品をレジに通してもう。

「俺の家、今日誰もいないんだー。今日は俺一人。」

嬉しそうに言う右京。

「へへ、たゞのしそうだねえ…」

私がそういうと、右京はレジの手を休め、私の顔を見ながらちよつと真顔でこう言った。

「遊びに来る？」

……と。

さつき、

家に誰もいなって言ってたじやん？

遊びに来る？…って…なんか怪しげに聞こえるのは私が学に毒されたからか…？

「んー…きょ、今日は、やめよつかな…？」

じゃあ、いつならいいんだ？…と自分に突っ込みを入れながら私は続けた。

「友達の家、泊まりに行くし…」

「そつか…・残念」

右京が言つと社交辞令でもホントに残念そうに聞こえて『悪い事したかなー?』とか思つてしまつ…。

休憩中、唯衣から電話が来た。バイトが終わったらそのまま唯衣の家に泊まりに行く予定だったから。

それで、つい、ポロッと…わざの右京とのやり取りがあつた事を話してしまつた…。

『あああああ…？それってピンクなお誘いじやん』
ああホラ…キミに言つとね、なんでもそういう話になるからね、黙つてようとしてたんだよ…。

ああ…言つた私がバカだつた…。

「ああ。でもホラ、もう断つちゃつたし…」

樂觀的な物言いに唯衣は喰つてかかる。

『何、氣楽な事言つてんのさ…あああ…もついい…後で行く…』
そう言つと電話を切られてしまつた…。『氣楽』つて…？？

唯衣との電話で休憩のほんどの時間を使つてしまつた…。

休憩から戻ると今日も牧が右京をからかつてゐる…。右京がなんでもキレないか不思議なんだけど……？何を話しているんだろう…？私は出来るだけ気配を消して一人に近づいた。

「眼鏡くーん、いつになつたら告るんよ?ボヤボヤしてたら取り返しつかなくなるよ?」

「うんうん…？」

「田向だつてさ、ボヤボヤしてたから收拾つかなくなつてんだしさあ…」

うるさいなつ…そこで私を引き合ひに出すか?普通…

右京は黙つて聞いてゐる…聞いてゐるつていうより…耐えてゐる…？？

「昨日なんてさ、かわいかつたな…んでもつて」

！？

「柔らかかつたなー…田向の」

「牧」

私は牧の言葉を切つた。

「…！」

私がいる事にホントに気付かなかつたのか二人は驚いて私の方を見た。

そして右京は私が牧の言葉を切つたのが気になつたのか、牧に向きた。

直り問い合わせた。

「なんだよ…？志摩さんに…何かしたのか？」

牧は気を取り直して、右京に語りかけた。

「あ、それはね」

「牧！」

「だつてえ、眼鏡くんが言えつてえー…」

「それ言つたら…私があんたを殴るよ…」

私は冷ややかな目で握り拳を牧に見せる。

「恩田牧くん退場…」

牧は何か口答えしようとしていたが私は聞く耳持たず、牧は残念そうに帰つていった…。

右京は最後まで気になるらしく今度は私に聞いてきた。が、

「私、タバコの売り上げ集計行つてきます！」

私はそれだけ言って、逃げた…。

怪しいかとは思つたけど…右京には関係ないしそんな話したところで仕方ないからさ。

私がタバコの売り上げ集計から戻ると、右京のレジには学がいて、右京は千円札を数えていた。その間、ヒマそうに店内を見回してた学と目が合つたが、私は露骨に嫌なものを見るような目で学を一瞥し、目をそらした。

…今、一つ一つ番会いたくない人だつた…。

バイトが終わると唯衣が外で待つていた。

「お疲れ様でした…」

右京はバイクにまたがりエンジンをかけた。唯衣はそんな右京に声をかけようとする。

「右京くーん…」

唯衣の声はエンジン音にかき消されて右京には届いていないようだ

右京はバイクで帰つて行つてしましました。

すると唯衣は何を思つたか、自転車にまたがり、右京を追いかける

「え～…無理だつて…やめなよ…。」

バイクを追つて、自転車で爆走する女、唯衣…。

とてもじゃないけど、私は唯衣に追いつけない…。

ゆうく、一人が通つたであろう道を自転車で追尾する…。そして、

昨日の公園から唯衣の声が聞こえる…

「…………！」

遠すぎて何言つてんのか、わかんないよ…まあ、私を呼んでいる事ぐらにはわかつたけど。

あ～ハイハイ行きますよ…。

私は唯衣のもとへ向かつた…。

「は～…は～…」

そんなに苦しいならやめりや～よかつたのに…

「結局、追いつかなかつたでしょ…？もう帰ろ～よ…」

唯衣は息を切らしながら指差した。

「は～…学の…家…ぜ～は～…裏…」

「学の家の裏…」

「学の家の裏？」

力強く頷いた。

「な、何…？本氣で私を右京の家に行かせる気…？？」

唯衣は殺氣立ちながらも強く頷いた…。有無を言わさず…

「え～…イヤイヤイヤイヤ…ムリムリムリムリ…」

私は唯衣に右京の家まで引きずられてます…。

「」の期に及んでまだ、言うか…」

「」の期に及んで、つて…ピンクなお誘いって決まったわけじゃないしやー…」

逃げ腰な私の発言に業を煮やした唯衣は、私に尋ねるよつて言つた。

「じゃあ何か？こんな遅くに男と女一人きりでトランプでもやるつってか…？」

唯衣の迫力に圧倒されながらも逃げ腰な態度は崩さない私。

「イヤイヤイヤイヤ…ピンクなお誘いなら、それはそれで困るんだけどやー…」

「あ、～～～往生際の悪い子だね…ピンクなお誘いじゃなかつたらトランプして帰ればいいんだ。ピンクなお誘いだつたらやつっちゃえばいいじゃん！右京君いいじゃん！優しそうだし…初めての相手にはもつてここの相手でしょ？」

『初めて』…とか生々しい事言つなー…！

「あー…つるせー、つるせー…。嫌がりやー無理には襲わんつて、学じゃないんだから…」

そんなのわからないじゃないかー…！
唯衣は私の事などお構いナシに右京の家の前まで私を引きずりこんだ…

唯衣は有無を言わさず右京の家のチャイムを押して、私をドアの前に押し出した。私は唯衣の後に隠れようとすると一步遅く右京が家から出てきた。

「こんばんわ！あたし、ひなの友達です。どおも～！コレ届けにきました。：じゃ、あたしは用済みなんで、おーとまします！あとよろしくう……」

唯衣は言いたい事だけ淡々と吐き出すと、とつとと帰つて行つた。

私をなめるなよ……お？唯衣の行動なんてお見通しじや！

「あの、お願い。10分かくまつてくれないかな……？」

「え……？ 10分？」

私の変なお願いに右京は怪訝な声を漏らす。

「アレ、10分は見張つてるから……10分経つても家から出て来なかつたら私が観念したんだつて思つて帰つてくれると思つんだ……」

「……」
どこに潜んでるかわからぬ唯衣に聞こえないように私は右京に言った。

右京はわけもわからぬまま私を家に招き入れてくれた。

「お邪魔します」

「どうぞ～」

家の中には人はいない。ホントに右京一人だつたんだ……

「そこらへん、座つてて。今、飲み物……なにがいい？」

「あ、おかまいなく……」

私は居間のソファーに腰掛けながら語つた。右京はテーブルに飲み物を置いた。

「どうぞ。10分つて結構長いからね……」

右京は私の隣に座つた。

「『めんね、ホント…』

右京には何がなんだかわからないだろ？…。私は説明する事にした。
「ホントはあの子の家に泊まるつもりだったのね…。でも、私がついポロッと…右京に『遊びに来ないか』って言われた事話ちやつて…あの子、勝手に舞い上がつて」

そこまで言つて私は右京の顔色を窺つた…。

右京はいつもの穏やかさを失わずただ私の話を傾きながら聞いていた。

「でね、『…こんな夜遅くに誘われたって事はピンクなお誘いに違いない！…一人きりでトランプするつもりなわけないだろ…』って…強引に…」

「ピンクな…お誘い？？」

ああ、こんな事一般用語でも何でもないもんな…。

「ええっと…ピンクなお誘いって言つのは…その…あ、あのね？」

私は気を落ち着けるために飲み物を口に運んだ…。

右京は真顔で考え、

「あー…語感でなんとなくは…×××な、お誘いの事ね…」

「ガホ…ツ…！」

あまりにもストレートな物言いに飲み物を吹き出してしまつた…。

「ああ～！大丈夫？？ごめんごめん…違つた？」

「「ガホ…ツ…」…違わないけど…。ストレート…過激…鼻から口

…ラガ…痛い…」

私が落ち着いて、また話に戻つた…。

「『めんね…なんていうか…えらい早とちりで巻き込んでじやつて…』

「いや…まあ、そういうの、全く思つてなかつたわけでもないし…」

「

そこまで言つと右京は私の方を見た。
「志摩さんが許してくれるんだつたら、それもアリかなつて…」

そこまで言つと右京は私の方を見た。

!!

なんて言つたか、この手の雰囲気はトライになつたあるところつか

。

私はわざとりしゃく想い出したよつて言つた。

「あー、ね、右京、この前から、牧が来ると様子変だつたよね……？何言われてたの？」

右京はちょっと言つづらうつて困つていていた。

「あ、別に言いたくないんだつたらいいの！私に関係ない話なら別に……うん」

自分の知らなことうりで自分の話題が出てると知りたくなるだけで

。

「いや、志摩さんの話なんだけど……」

「言つにくい話題の、私の話をしてたんだ……？」

気になる……でも、聞いていいものか……やがて、意を決したよつて

右京は言つた。

「アソシの言つことだからあんまし信用してないんだけど。志摩さんが『初めて』だつて……『まかり間違つてお前が相手する事になつたら優しくしりよ』つて……」

ヤブヘビ……

聞かないほうがいい事もあるよね……

「あー……そ、そんな事話してたんだー……へー……あいつ、そんなことをねー……」

怒りなのがなんのか分からぬけど私の声は妙に震えてて可笑しかつた。

あの、キレイな顔を傷物にしてやろうかね……

頭の中は牧に対する力の抜けた怒りみたいな変な思いに気を取られていた。

そんな時、右京の手が私の手に重なつた……

「ボーつとしてたら、志摩さんが誰かのものになるかもしねない……とも、言つてた……」

言つてる右京の顔が、今まで見た事ない『男の顔』になつてた。色っぽいかも…なんて、他人事のように見てた…。

いやじやなかつた。この人にだつたら恋できるかもつて思った。

右京の顔が傾き、私も素直に目を閉じた。

P.iP.iP.iP.iP.i……

携帯電話のけたたましい音が静まり返つた部屋に響く…。

「……」

私達は一斉にお互いから体をのけぞらせ、お互いに体」と反対を向いた。

緊張してゐる時つて呼吸してないのか…？つてへりこ空氣を欲する私達…。

「はー…はー…」

一人で息を整えた。

ただでさえ、緊迫した状況で、心臓バクバク言つてんのに、携帯の着信音は心臓に悪い！

「誰よ一体？！」

私は携帯を手にし、液晶を見て出る氣をなくした…。

『学』と表示された着信…。私は携帯をテーブルに置いた。

「出ないの？」

右京がまだ荒い息を整えながら言つた。

「いいよ、どうせまた、暇つぶしの相手をせられるだけだからね…」

投げやりな私の様子を見て、誰からの電話なのか右京は察したよつだつた。

「出ればいいのに…。じゃないと、またかかってくるかも知れないよ」

いつもなら…これだけ鳴らせばとひくと出でるはずなのに…これだ

け鳴らして出なかつたらあきらめればいいのに…。

「志摩さん…出なよ。言いたい事があるなら全部言つた方がいいつて…」

右京がそう言つて渋々電話で話を止めた。

「…………はい……なに? 何か用?」

露骨な態度で電話に出てる学。学は私のそんな態度も意に介さずマイペースに話してきた。

『今日、家に誰もいないから…来ない?…………会いたい』

「行かない』

私は即答した。

呆れていた…『会いたい』つて言葉に女がみんな、搖りぐと思つてるのか?私は、再び口を開いた

「先客がいるし…彼女を呼べばいいんじゃない?たくさんいるんでしょ?」

よりよりよつて、何で私を呼ぶの?…なんか、段々、腹が立つてきた…

「昨日の今日でよくそんな電話かけて来れるね…?どんな神経してるので…」

夜が明ければ昨日の事を忘れられるオメデタイ頭の持ち主なんだろうか…?』

「悪いけど私、今すぐここ頭にきてんのよ…」

学を相手にスラスラ言葉が出てくる。感情的に、とこうよつは冷静に言つていい事だけ言つてこいる…

「ヒマだから会おつ…~セミシにから会おつ…?私が喜んで行くと思つてた?…悪いけどね、私だつて暇つぶしの相手なんて[冗談じやないのよ』

学の返答はない。聞いているのがどうかを笑じいもんだ…。

「お望みどおり、あきらめてあげるから…もつ電話して来ないで…」

学の返答を待たず、私は電話を切つた。

虚しかつた・・・

聞いているかどうかわからない相手に一方的に自分の思いを吐き出すのって…ホントに虚しい…。

学と関わると『虚しい』だけ。もう、ホントにそれしかない…。

私は右京に背を向けたまま独り言のよつに言つた。

「……雰囲気ぶち壊しだね」

右京はいつもの優しい口調で私に訊ねた。

「志摩さんの言いたい事、全部吐き出せた?」

「吐き出したけど…相手には届かなかつたな…最後まで」

右京は脱力したようにソファーに腰掛け言う。

「ホント、ついてない…いいとこだつたのに…」

私は振り向き、右京を見た。右京は天井を見つめ放心していた。

「ごめんな、ホントに…」

謝る私に右京は我に返り、慌てたように言つた。

「別に志摩さんに謝つて欲しいわけじゃないよ…電話に出てつて言つたのも俺だし…いや、電話来た時点でもう、俺のチャンスは終わつてたんだよなー…」

「???

右京は私を見据え言つた。

「電話が来るまでは志摩さんは確かに彼の事を忘れてた。俺の事、少しでも考えててくれた…違う?」

確かに…。学の事なんかすっかり忘れてた…。

右京とこのまま一緒にいてもいいと思つた。

「電話が来ちゃつたからなー…」

言つて右京は、参つた…という風に右京は頭をかきむしる。

「これでもう、志摩さんの頭から彼が離れない。あと何時間一緒にいても一緒。俺の事だけ考えてくれる事はもうなくなつた…。」
決して好きだつて気持ちじやない…凄く頭にきてる…けど、学が頭から離れない。

「志摩さん…行きなよ。今ならまだ間に合つ。行つて、彼に会つて

分かるまで話した方がいいよ。』

『そんな気分じゃなくなつたから』 … つて追い返されるかと思つてた…

『彼の所に行け?』

… 右京がどうしてそんな事を言つのか、私は少し戸惑つた。

「このままだつたら志摩さんはずっと彼の事を引きずる事になる。誰といても、誰と恋してもずっと、彼と誰かを重ねる事になる…」

右京は… そういう経験をした事があるんだろうか… ?

「でも… 私… 」

「あきらめる位だつたら玉砕しちゃいな。そうすればスッキリするよ?」

右京の言つ事は妙に説得力があつた…。

「もし、玉砕したら俺でよかつたらいつでも空いてるからさ」

右京はそう言つと冗談交じりに笑つた。

私は右京に説得されて学の家に向かつた…

右京の言葉が頭から離れない…。

学を引きずりたくない…。

そう思いながらも、逃げたしそうな気持ちでいっぱいだつた。昨日みたいな事があつたら、もう誰も助けてはくれない… そう思つと怖かつた。右京の事好きになるかも… 本気で思つた。学からの電話で… 学の事、考えないようにして頭から離れてくれなかつた…。

気が付くと私は学の家の前にいた…。あれだけの事を言つたのに、ここまで來た私を学はどう思うだろ?… ?

もう、他の彼女が来ているかも知れない…。

彼女とはちあわせたら、彼女になんて思われるかな… ?

ああ… いつもそうだ… 私はいつも人の目ばかり気にしてた。いつも、

いつも… 今だつてそうだ! 他人ばかり気にして…

恋をする前の私はこうじやなかつた…。

恋をして私はダメになつた。

なのに……こんな自分の事、嫌いになれない……。
人の目なんてどうでもいい。私は自分のしたいようにすればいいんだ……！

私は自分を奮い立たせ、学の家の呼び鈴を鳴らした……。
外から見て、居間の明かりは消えていたけど、学の部屋の明かりはついていた。

しばらく待つたけど返答がない。もう一度呼び鈴を鳴らそうとした。
その時、学の部屋のカーテンが開いて、学が顔を出した。
何か……言わなきや……

「暇つぶしのデリバリーで～っす」

口を突いてでてきた言葉が「コレ。我ながらかわいくないと思つた……。
学は私の存在を確認するなり……

素早く、部屋のカーテンを閉めた。

「…………。」

……あ～あ

まあ……そりやあね……

あんな生意気な事を言っておいて何を今更……って、感じだよね……？

……見事な玉碎つぶり……所要時間5秒つてど!!……？

少しの間、放心状態の私たつたけど……

「ふふ……フランれちゃつた……」

不思議とショックではなかつた。不思議と笑みがこぼれていた。

「うん、私は頑張つた。」

自分勝手な自画自賛だつたけど、悔いはもう、ない！

『私は頑張つた』って納得できたから……もう大丈夫……！
……いつまでもここにいても仕方ない……帰ろう……。

私は学の家の玄関に背を向け一歩進んだ時だった

…………ド「コオ……！」

突然背後からものすごい音が聞こえて驚いて振り向くと学が荒い息で立っていた。

私は驚き、口を開いた。

「ど……どひした… の？？す、じい、音…」

「玄関…建て付け悪くて…」

息を荒くして答える学に私は後ずさりしながら言つた。

「そ、そなんだ。大変だね…。あ……ぐ、別に、呼ばれたから來たんじやなくて、友達の家の帰りで…そ、そ、う、うん、…き、気が向いたから…」

学は私に向かつて歩いてくる…。ゆっくり、一歩ずつ。

「別に会いたくなつたわけじゃないし、好きでしょ？がないわけじゃないし、」

私は早口でまくしたてた。学は何も答えず歩いてくる。でも、虚しさは感じなかつた。

「氣まぐれで、意地悪で、何考えてんのか意味不明だし…」

私がそこまで言つと学は田の前に立ち、私の両肩に手を置いた。

「…………！」

私は…怯えている？

学がすぐ田の前にいるだけで言葉を失つてしまつた。

学はそんな私を抱きしめた。

「…………！」

いきなり抱きしめられて混乱する私に学がよつやく口を開いた。

「…………他に…言いたい事は？…全部吐き出しちゃえば」

予想もしなかつた優しい口調に私の思いはあふれ出した。

「女と見たらエッチな事しか考えないし、私はどうせ暇つぶしにもならないし、彼女とかいっぱい、いるらしいし…私の事は…！」

思い切り吐き出したら涙が出てきた。

学は私の体を離し、まっすぐ見つめてきた。

「私の事……どひ思つてるの…？」

今まで、一番聞きたくて、怖くて聞けなかつた……。

答えなんて分かりきつてた……だけど、聞きたかつた……。

もちろん期待なんか全然してない……

『別に。』つて言われるのがオチだから。

『別に何とも思つてない』『好きでも嫌いでもない』……そう言われるのが怖かつた……。

学は切なげな表情を浮かべて、顔を傾けた。

ゆっくりと近づいてくる学の顔を私はぼんやり見ていた……。やがて、自分の唇に学の唇の感触が触れて、ようやく学とキスしてるんだ……って自覚した……。

私達はキスを繰り返した……。何度も、何度もその行為に没頭するかのように……。嬉しくて……嬉しくて……胸が苦しくて、痛かつた……。ようやく唇が離れて、お互い小さな吐息をもらした後、学が言つた。

「俺の部屋、行こつか……？」

それがどういう意味かは私にもわかる。私は頷いた。

何故かはわからない。でも、後悔はしないと確信してたから……。

学の部屋、月明かりに照らされて……

私は初めて男の人と結ばれたんだ……

第10話 背徳

朝、目を覚ますと見覚えのない天井に少し戸惑った。

「……」

ふと横を見ると学が寝息を立てている。
夢じゃ……なかつたんだ……。

時計を見ると6時47分。

……一度寝……つてわけにもいかないだろ? し……。

……学は気まぐれな人だ。

昨日冷たかったかと思うと、今日急に優しかったり……
昨日優しかったかと思うと、今日冷たくされたり……
学が目を覚ます前に帰ろうつか……? 今の、幸せな気分をぶち壊される
前に……

そうと決まれば、支度しよう……。

私は学に気付かれないようじにゆつくりと体を起こした。
えつと、まず、は自分の着ていたものを目で探す……。
見つかったのでベッドから出よう……。

ん……?

学の手が私の手首を掴んでいる。

「……ん、おはよ」
学が寝ぼけて言つ。

「お、おはよー!…」

私もあわてて返事する。

「体は…辛くない?…平気?」

学の口から意外な言葉に驚きながらも私は言つ。

「平気。学が、優しくしてくれたから」

「そか…」

学はもう一度眠りに入る体勢だ…。

私は一通り着替えを済ませた…。

もちろん、置手紙なんてしない。なんか、勘違い女って感じでイヤ
じゃない?

私は足音を忍ばせ、ドアまで向かった。

「ひな

急に呼び止められ、驚いて振り返ると、学はベッドから身を起こして、
私を見ていた。

「あ…なんか、眠そうだったし、起これないで行こうかと思つて

…」

「…帰るの?」

そんな…捨てられた子犬みたいな田で見ないう…。
そんな田で、学はこう言つた…。

「また…会える?」

学の言葉に私は首を振つた。

「もう会わないほうがいいと思つ。…私の為に。会えれば、学を独占
したくなっちゃう…」

学はそんな私をじつと見ていた。

「昨日は…なんていうか、雰囲気が盛り上がり…こんな風になつ
ちゃつたけど、学の気持ちが私にはない事わかつてゐし…。」

私は自分に言い聞かせるように続けた。

「卑屈になる恋愛はしたくないから…」

「後悔してんの？…俺と、こんな風になつて…」

学の問いに私は笑いながら答えた。愚問だったから…

「どうして…？ラツキーだつたと思つてるよ？初めての相手が大好きな人とだつたんだから」

じゃあ、あの時どうして逃げたんだ？…つてツツ「ミミ」が入らなくて良かつたと思う…。

自分でも、うまく説明できないから…

私の家の近くまで行くと家の前で見覚えのある人間がいる…。

櫻井…？

私は咳払いして櫻井に自分の存在を知らせてから、家の近所の公園に身をひるがえした。櫻井は後をついてきた。

公園についてから私は説教を始めた。

「ちょっと…！やめてよねーーあんたウチの」近所じゃ不審者として記憶されてるんだからさー…」

不審者と言つ不愉快なキーワードに櫻井が突つかかつてくる

「不審者つて俺の事ツスか！？」

あんた以外に誰がいる？

「とにかく、不審者と一緒にいるところ」近所さんに見られたら困るらしいワケよーあんたも、もし空氣読んで行動してね

「押忍…」

今、朝の7時前だぞ？私の迷惑も考えろ…。

今日は特別この時間に起きてたけど、普段はこの時間は寝てゐつうの…。

「で、何か用？…くだらない話だつたら殴るよ」

すると、櫻井は神妙な顔つきで話しだした。

「玲夏と…うまくいってなくて…」

「あ、～～つ！？バイト、ズル休みして、毎日余つといて、うまく

いつてないもヘツタクレもあるか！」

予想だにしなかつた私の発言に櫻井も少々ショックを受けたらしく

言葉が出ない様子…。

「…つたく！ばっかばかしい！右京にンな事言つたら殴られるから

ね！」

と、言いつつ、落ち込む櫻井を不憫に思い、私は声をかけた。

「別に…玲夏に別の男の気配…とかそんなんじゃないんでしょ？何

がそんなに落ち込むほどうまくいってないのよ？？」

櫻井が口を開いていた瞬間、公園の近くの家から出でてきた高校生

が叫んだ

「あーーーー田向じゅん。おはよーー！ラッキー 朝から田向に会えるなんてつ！」

朝からテンション高い牧だと確認し私は訊ねた。

「牧！？あんた『近所さんだつたの…？』

牧はこれ以上ない位、機嫌な顔をして何度も頷いた。

「俺ん家ね、あそこなんだつ 今度遊びに来なう。もちろん田向一

人で」

そう言うと牧は『じゃ、もうガツコ行く時間だからー！』

…と言ひ残し去つて行つた…

朝からのハイテンションにあっけに取られて我に返つて櫻井に向き直つた。

「で、アンタの話は…？」

「いや、あの人見てたらそんな悩みアホらしくなつた…」

と、櫻井は言つた。

でも、この時私が話を聞いてあげていればこの後に起こる事を、回避できたのかも知れない…

近頃、私の周りではなんだかバタバタしていた…。

「最近、学の様子がおかしいんだ…。」

私と麻美ちゃんは公園でベンチに座り、アイスを食べながら話していた…。

「麻美ちゃん、学の話はもういいんだってば。聞いても『ああ、そ
う』位しか言えないよ?」

麻美ちゃんは木のスプーンを口に押し当て、考え事をした後言った。

「……志摩ちゃん…学と何かあつた?」

ぎく…

「……あつたんだね、それ最近?」

「……2週間ぐらい、前…かな」

麻美ちゃんは私の答えを聞いた後、納得したのか何回か大きく頷いて言つ。

「そんくらいの時期だよー学も牧も様子がおかしくなつたのー…
「牧も…?」

興味なさげに相槌を打ちつつ、話を促す私。

「学は変に優しくなつたし、会つてもエッチなしだし…。逆に牧は
イライラしてて何に対してもキレやすくなつたな…。学校もサボり
がちになつたし…つて。聞いてる?」

私は溶けるアイスと格闘しながら領いて続きを促した。

「牧つて、見た目あんなんでバカそうだけど、勉強もできるし、す
ぐく真面目で、学校なんかサボつた事なかつたし、あたし心配だよ

…」

最後の一口を頬張りながら私は言つた。

「それつて、牧の方が心配じゃない…? 学の変…はむしろ『普通』
で変、つて事でしょ…? 牧はヤバイ方向に変つて事でしょ…?」

「一人して、変だから志摩ちゃんがらみかなー…とは思つて…。
「何ソレ…?」

麻美ちゃんは急に真顔になつた。

「牧は志摩ちゃんとあつた出来事に影響されやすいから…機嫌がメ

チヤメチヤ良くて気持ち悪いくらい優しい日もあつたし…」

私に関係してるとしたら、興味がないとか言ってられないけど、責任も持てないもんな…。

「麻美ちゃん、なんかあつたらまた連絡してね?」

私は立ち上がりながら言った。

「ええ? もう帰っちゃうの? ?」

麻美ちゃんは立ち上がる私を見ながらつまらなそうな顔をした。

「これから別の友達の『ゴタゴタ』にも付き合わんとならんのよ…」

「そつかあ…大変だねえ…。わかつたあ…。またね」

そう言って麻美ちゃんは小さく手を振った。

別の友達の
「ゴタゴタ」…。

「な…なんでそうなるのか、私には理解できんわ…」

事の発端は唯衣からだ…。

片思いの瀬戸君を夏祭りに誘い、いい感じに思えたのだが、それ以降のイベントに誘おうとした時に『彼女ヅラしないで欲しい』と言われ、それから連絡を取つていないそうだ…。

一方、櫻井と、玲夏もギクシャクしてうまくいっていなかつたらしい…。

そこで櫻井が玲夏の事を唯衣に相談した所から、事態がおかしな方向に…。

櫻井と唯衣が意気投合してしまい、どうせうまくいってなかつたんだし別れる!…と、ノリと勢いで玲夏を一方的にフリ、くつ付いてしまった唯衣と櫻井…。

唯衣のさみしい気持ちはわからなくはないけど…

なんで櫻井なの…? だってあんた…玲夏に紹介する前にあんたに言つたら『好みじゃない』って断つてたじやん??だから玲夏に紹介したんじやん? 玲夏『バツチリ好み!』って言ってたし…。櫻井は

…まあ、女なら誰だつていい…って感じなのはつかつかする気が付いてたよ…

だつたら学校の女の尻でもおいかけてるよ…あんたに玲夏つていうのだつて破格な紹介なのにも…もつたいなかつたのにも、唯衣にまで手はだしますか…。

「…魔がさした…で、今なら間に合ひんじゃないの…？」

「…………」

唯衣も櫻井も無言だ…。

この二人、私に何を求めてんの…？

「ひな、あのわ、玲夏の様子見に行つてくれない…？」

玲夏の事は心配だけど、罪悪感で顔合わせにくいつてやつか…。

私は、玲夏の様子を見に行く事にした…。唯衣に言われて…つていうのがシャクだけど。

玲夏は…

「あれ…？志摩ちゃん…久しぶりー！」

まるで…憑き物が落ちたかのように明るい…。

「あ、あたし、櫻井と別れたから…今は唯衣の彼氏」

ケロッとして言つ玲夏に私は謝るしか出来なかつた。

「「めん、玲夏。もつとちやんとした男、紹介すればよかつたよ…」

そういう私に玲夏は首を振り、泣き出してしまつた…。氣丈に振舞

つてもやつぱりショックだよな…。

友達に彼氏取られたつていうか、彼氏に裏切られたつていうか…どつちもか…

玲夏を落ち着かせ、唯衣と櫻井の元へ急ぐ私だつたが…

…とんすらか…

へー…そつ…、そういう事をするなんだ…

彼らは私に何を求めてるんだ？？

そしてバイト…

そして今日もサボり…

そのままクビにしてもらえば……？

「右京、今日は櫻井…何だつて？」

「普通に、生徒会が…つて。さすがにちょっと…ね」

我慢しそぎだ…キレる、右京…

その日、店長が櫻井の家に電話をし、『生徒会が忙しくてバイトに出来られないほどなら辞めても構わない』と、告げたそうな…。

気を取り直して右京は明るく言つ。

「まあ、櫻井の彼女つて、ちょっとかわいいからね…バイトのサボつてまで会いたい気持ちもわからなくはないんだけど…」

玲夏のこと…かな？

「…玲夏の事言つてる? だつたらもう彼女じゃないけど…」

その日の帰り、玲夏の家に寄つた。

「志摩ちゃん…どうしたの？」

玲夏は妙に機嫌よく私を出迎えた。

「あのね…唯衣に彼氏紹介してもらつたの…」

「へ…？」

「唯衣のイトコ紹介してもらつたの…」

「いつ」

「今日…」

「…」

手回しがお早い事…。開いた口が塞がらない…。

人様の恋愛事情には干渉したくないけど…。

なんていうか…男なら誰でもいいのか…つて…

ダメならハイ次…つて感じでいいのか?…と。いや…それで幸せなら文句は言わないけど…

それがイマドキの恋愛ってやつなのか…? つて私は疑問に思つた…。

第11話 解けない…

第11話 別れと、複雑なキモチ
「別れて欲しいの…」

ほら、やつぱりね…？絶対長続きしないと思つたもん！

私、ナゼか唯衣と櫻井の話し合ひ（？）に立ち会わされてる…。
私を立会人にもしたのも、櫻井が逆上して襲いかかって来たりないた
めに…でしょ？ハイハイ。

唯衣のこいつ…うズルイところは好きになれない…。

こんな時だけよびだされて、私はいい加減ウンザリしていた。
付き合ひのも勝手にしたのなら別れるのも勝手にしたら良いと思つ
…。

私は呆れながらその光景をちょっと遠くで見ていた。

櫻井はため息を一息つくと唯衣に言った。

「瀬戸…とか言うヤツがまだ好きなんだ…？」

唯衣は何も言わずには頷く。

唯衣が瀬戸くんの事をまだ好きだと言つ事を、わかっていないながら玲
夏をフツて唯衣と付き合つてたつて言つのか？…いつは…？
…んなワケないじやん…。

「もつこんな寄り道するなよ？好きなやつだけ追いかけてろ？…」

櫻井は唯衣の顔を覗き込み言つた。

あー…寒いセリフ…。ドラマかよ…

言つてる自分に酔つてゐる……って感じで、悲壮感は全く感じられない
かった。

「じゃ、やつこひ」と「…と並んで櫻井は逃げるよつて帰つて行
つた…。

櫻井は本当にショックだつたんだらうか…？
お互い、淋しいだけで意氣投合して付き合つただけの安い関係だつ
たんでしょ…？安い恋愛のエンターテイningは、やつぱり安っぽくて…
後味がすゞく悪かった…

今日はバイトが休みで、麻美ちゃんから電話があつて、前の公園で
会つ事にした。

「あたし、学と別れたの」

その時に麻美ちゃんにそう言われて私は耳を疑つた。

「どうして？学に飽きた…？」

「まつさかあ…」

私の問いに麻美ちゃんはすかさず答えた。

「あたしが、フられたの…まー…、学校にいる『学の彼女』は全員
フられたね…」

「…………」

「あたし、牧と付き合つて嫌なヤツだつたの…牧、優し
いから、それに甘えて、どんどんやな女になつてつてし…。だから、
優しくない学と付き合つたらなんか変わるかななんて思つたんだけ
ど…。変われたのか正直わかんないや…」

こんな時、何て言つてあげればいいんだら…？

そんな事を考へていた時、麻美ちゃんと田が合つた。
「やあだ！志摩ちゃん、そんな顔しないでよーあたしは平氣だよ、
うん、全然平氣！」

「我慢、してない…？」

つい、余計な心配してこんな事を言つてしまつ…。

「志摩ちゃんは本当に優しいんだねえ… 麻美、だから志摩ちゃん好
物…」

そつ言つて麻美ちゃんは抱きついてきた。

私は麻美ちゃんの頭を撫でた…。

こんないい子… 学はどうこいつもりでフツたんだろ？…？

この子の何が気に入らなつて言つんだら？…？

「…大丈夫だよ… 志摩ちゃんは人の事考えすぎ… 自分の幸せだけ
を考えなきゃ」

… すぐに… 学の顔が浮かんてしまつ…。

学が好きで、私の事を…私の事だけを見て欲しいと思つた…。

そのうちに何番田でもいいや… つて思つよになつて、

ああこいつ事になつたけど…

いや、学の部屋で朝を迎えてしまつたら…

やつぱり私だけを見て欲しくなつて、でも、冷たくされるのが怖く
て…逃げた。

… 頑張る事から逃げてしまつた。

「志摩ちゃんは学の事… もうここの…忘れちゃうの…？」

私は笑つて答えた。

「ん。バイク中に店に来るけど、顔見なこよに避けてる…。

私、自分に甘いから、学の顔見たらまたす~ぐ好きになつちゃうか
らね…」

「電話とか… 来ないの…？」

そういうえば、麻美ちゃんは私の携帯番号を学に教えた張本人……だつたっけ……。

「最初はね、来たけど、最近は来ないな……」

「そか……。志摩ちゃん、学の事避けてんのか……」 そういう会話をして、麻美ちゃんと別れた。

家に帰ると、しばらくなかつた恐怖が訪れた……。

櫻井が家の周りをうろついている。

お前ホントに、いい加減にしろよ……？

櫻井は遠目から私に気付き、近づいてきた。
わかつたわかつた……偶然ですねって言つんでしょ？

「志摩さんに会いたくて！」

予想が外れた……。少しは成長したんだね……。

でも、私に会いたい理由はわかつて……私に愚痴りたいんでしょ？
私に慰めて欲しいんでしょ？私は近くの公園で話だけ聞いてやることにした……。

また、家の近くうろつかれても困るし……。
この公園の奥のほうに藤棚があつて、

そのそばのベンチで寝てる人がいるので襲われる心配はないとは思う……。

私は櫻井に口を挟む間も与えずまくし立てた

「自業自得！同情の余地ナシ！玲夏の方がかわいそうだったよ……！」

「わかつてはいるんですけど、誰かに甘えなきややりきれない夜もあるんですよ……」

知るかよーしかもなんで、年に甘えようとしてるの??

「私に甘えられても困るよ！私、今回の話に何の関係もしてないんだし！」

……だから甘えやすいのか???

大体、私に甘えようと考える事 자체考えが甘くない？

「私、自分以外は甘やかさない主義なの！」

見事な開き直りつぶりに自分でも感心するが、なんとなく必死だった：

櫻井の言つ『甘え』とは体で慰めるという意味に他ならないから、その証拠にさつきから流れてる変な空氣に気付かないフリをして振り切つていて。

「あのさあ、甘えたいんだつたら別の人間がいるでしょ！……なーんで私なの？？？玲夏の所にでも戻つたら！？？」

「玲夏には……ひどい事したし、今更、会いには行けない……」

……なるほどね……キミの考えが手に取るようにわかるよ……。玲夏に悪いなんてホントは爪の先程も思つてない。今更フツた女の所に戻るなんて、かつて悪くてできないと思つてるだけ……

生意氣に、プライドだけは一人前……

あ、でも、玲夏にももう彼氏がいるんだつけ……唯衣のイトゴ。

こいつ、ホントに誰もいないじゃん……。

彼氏のいない友達なんて唯衣しかいないし、その唯衣にフリれたんだから……

……。

『一鬼追うものは一鬼も得ず』……みたいなもん？

結局誰もいなくなつてしまつた……

哀れな男……。

つていうか……女欲しいなら学校で探せばいいと思つ……

私はムカつきながらそんな事を考えていた。

ふと気がつくと櫻井は私にじりよつてきてた……。

「え、？な、…つ、何よ？？」

「俺にはもう、志摩さんしかいないんです！」

自分の世界に勝手に入つて、『俺にはお前しかいない』発言されても…！

嬉しくない…つていうか、大迷惑だし！

「ほ…お？消去法、妥協案、で、日向に迫るか…。
いい身分だなあオイ…。」

二人しかいないと思つていた公園に私達以外の声が聞こえた。
私は暗闇に潜むその姿を凝視しその人に認識して声をあげた。

「ま、牧！？いつからいたのさ？？」

藤棚のそばのベンチで寝そべつてゐる人以外に人はいなかつたつて事
はそれが牧だつた…？

牧には私の問いには答えず櫻井しか見ていなかつた。

牧は私達に歩み寄り、私を後ろから抱きすくめた。

「これ、俺の…結構…マジ。」

牧は私を抱きしめる腕の力を少しだけ強めた。

「遊びや妥協で相手されるほど安い女じやねえんだよ…！」

牧の怒号が櫻井に浴びせられた。

初めてだつた…牧が怒鳴るなんて…。

牧の声が全身にビリビリきた…。私だつてビリつてゐるんだ…矛先で
ある、櫻井はもつとビリつてゐるだろ…

櫻井は私と牧を交互に見て鼻で笑い、帰つて行つた…。それが彼に
とつて精一杯の虚勢だつた。

「あの、牧…？」

私は恐る恐る、牧に声をかけてみる。
すると牧はいつもの声で答えた

「ん？何…？日向」

私はホッとながら言つた。

「そろそろ…離してくれない…？」

牧はダダをこねるように言った。

「ヤーダ、もう少しのままでいる。」

私は『『しようがないな』』のため息を小さく漏らす。

「牧…ありがとね…その…『遊びや妥協で』…ってやつ…。その場しのぎでも嬉しかったよ…」私は初めて牧に素直にお礼を言った気がする。

「その場しのぎじゃねーよ…ホントにわかつててる。日向は安い女じゃねえよ…」

照れ隠しもなくサラリと牧は言った。

そこで私は、今まで思っていた事を牧に聞いてみようと思った。

「牧は、麻美ちゃんの事が好きなんだよね…？」

「なんで今麻美の話？麻美はカンケーねえじやん…」

はぐらかす牧に私は続けた。

「学の事、キレイだつて…『うのは、麻美ちゃんの事があつたからでしょ？…牧が学にこだわるのは、麻美ちゃんの事がずっと引っかかるからじやない…？』

「だから、関係ないって！」

牧はちょっとと苛立ちながら否定した。

それから少し間をおいて、牧に言った。

「麻美ちゃん、学と別れたつて…。」

私が言うと牧の腕がピクッと震えた。

「麻美が…学と別れた…？」

「だから、今だつたらまだ間に合つ…。麻美ちゃんに、まだ好きなんだつて言つたら…？」牧からの返答はなかつた。

信じられないと言つた風に呆然としているよつだつた…。

「日向の…せいだ…」

私は信じられない言葉を聞いた。自分の耳を疑つた…。

牧が私を責める事なんて今まで一度だつてなかつたから…。

牧は私を振り返らせ、私の両肩を掴んで揺すつた。

「日向のせいだ！日向が学と……」「

そこまで言つと牧は言葉を急に止めた。

「私が学と何だって言つのよ？」

私は妙に冷静に、冷たく牧に問つ。牧はそれ以上言いたくないと言った表情をしていたが、やがて口を開いた。

「学が言つたんだ……日向と寝た……！だからちょっとかい出すなつて！……」

私は動搖した。学はおしゃべりだつたんだ……それを忘れていた。

「だ、だけど、それから一度も会つてない！バイトで顔を見かける以外は……ホントだよ！」「

牧は私の言つ事に激しく首を振つた。

私の肩から手を離し、ウロウロ歩き出し言つた。

「あいつも言つてた『一度だけ』だつて……でも」

牧は激しく動搖していて、全身が震えてた。怒りで……？

「『今までの女と別れて本気でひなと……』つて……！あいつ俺にそう言つたんだよ！……」

「でも実際、それからは何もないじゃ……！」

私もイラだつて声を荒げた。

私がそう言つと牧は冷静になつて考へ出し、こりこり言つた。

「そもそも、だ。なんで日向は学に抱かれた？」

そこまで聞いて、私は初めて牧の目が『ヤバい』感じな事に気が付いた。ヤバイ……逃げないと、そう思つても足がすくんで一步も動き出すことができなかつた。

牧は私の両肩を強く掴み、強く揺さぶつた

「なんで学なんだよ！？なんで……俺じゃないんだ……？」

私は足がすくんで動けなかつた。牧のされるがまま揺さぶられていた。

「俺じゃなくても良かつたんだよ……眼鏡のあいつだつて、さつきのヤローだつて、誰だつて良かつたんだよ……学以外なら誰でも……」

牧が何を考えているのか全然理解できなかつた……。

学以外なら誰でも、良かつた…？

「なあ！なんで学なんだ！？俺のどこが学に合ってる！？

…教えてくれよ…教えてくれ…日向…なんで俺じゃダメなんだよ…！

！？」「

牧は堰を切つたように今までの思いを私にぶちまけた。

不意にそんな私を揺さぶる手が止まつた…。

私はこの時初めて自分が泣いてる事に気付いた…。

「わかんない…牧の言つてることが、難しそうで全然わかんないよ…」

私が泣き出しことで牧は我に返り、私の体から離れた…。
牧が落ち着いた所で安堵の涙が追加され、本格的に私は泣き出していた…。

「…っく、…う…ひつ、…く…う…」

私は、私の頭を撫でようと差し出した牧の手に『ビクッ』その身を震わせて怯え、牧は手を引っ込んだ。

しばし静寂の後、牧は一言『…「めん」と言つて走り去つた。
今まで一度も責められた事のなかつた牧からの叱責のショックと、
孤独感…

私はしばらくその場にしゃがみこみ泣く事しか出来なかつた…。

第1-2話 好きだから信じられない…

「ひーどい顔…」

お密さんとして来ていた麻美ちゃんに容姿を描写される。

「え…そんなにひどい…？」

「ひーどい、ひどい…。志摩ちゃんの顔じゃないよ。実際志摩ちゃんじやないかと思つた。」

麻美ちゃんはアツサリ言つた。そして続ける…。

「田なんかボンボンに腫れて土佐犬みたいに腫れぼつたいし…」「土佐犬…？」

心配そうに私の顔を覗き込む。

「何があつたの？」

…ここで私が牧の名前を出せば麻美ちゃんは牧を責めるだらうし、それは私の本意じやないから…。

「たいしたことじや、ない…。麻美ちゃんにはわかんない事だし…

「『わかんない事』でも話して欲しいな…聞く位だつたら出来るのに…」

麻美ちゃんはすねた様に言つた後すぐ氣を取り直して続けた。

「どうしても辛い時は言つてね…？」

私が頷くと麻美ちゃんは安心したように笑つて、帰つて行つた。

その夜、店のお金を両替するため学が來た。

その時は丁度右京が休憩に入つていたため、私が両替をしなきやらなかつた。

「……元気だつた？」

札を数える時は話しかけて欲しくないんだが…とりあえず私は頷いた。

「今日、バイト終わつたら会いたいんだけど、時間空けてくれない

？」

私は首を振る。

「…どうして？」

私は札を数える手を止めた。

「会いたくないから。…私が学と関わると嫌な思いする人がたくさんいるから」

私は自分の意見を言って、再び札を数え始めた。

「そういえば…顔…すごいね。…泣いた？」

「…………」

札を数え終わって私は学に言った。

「麻美ちゃん…森繁さんの事フツたの…どうして？」

聞いてもどうしようもない事…どうしてだらつ？聞きたくなつた…。

「ひなと付き合おうと思ったから」

学は真顔でそう言った。

彼の、その言葉がどこまで本気なのか、よくわからない…。前のように浮かれて傷つくのが怖かつた…。

「森繁だけじゃない…他の女たちとも別れた。」

「一方的に…？」

「でも、別れた。」

流れる空気が重かつた…。

学のことは好きだ。

『付き合いたい』

…本気でそう思ってくれるんだつたら嬉しくないハズがない…。だけど、麻美ちゃんの事を考えると、昨日の牧の事を考えると、喜べない気持ちのほうが大きかつた…。

「バイト終わつたら外で待つてるから」

一方的にそう言い残して学は帰つて行つた…。

バイトが終わると学は本当に待つていた。

嬉しい…。

学が私の事待つててくれるなんて夢にも思つてなかつたこと。

1年前の、いや、数ヶ月前までの私なら、卒倒しているだろう。

学を取り巻く人の事、知らないままだつたら素直に喜べたのに。

私は複雑な気持ちで、学の顔をマトモに見れない。

「ひな、もう全部終わつたから……だから

「全部…？」

学は何のことを言つてゐるんだろう…？

全部、何を終わらせたんだろう…？

「そう…！全部だ、終わり…」

学は私に言つて聞かせるように言つたけど、私はなんとなく納得できなかつた。

「彼女達との関係の事…？会わなによつにすれば終わつた事になるの…？」

学は私の問ひに、少し考えたあとでこいつ答えた。

「そんな事言つたらキリがないよ…」

。

キリがない…！？

キリがないようにしたのは誰？！……誰のせい？？
自業自得でしょ…。

。

櫻井にだつたら…いや、牧だとしても私はそう言つていた所だらう…

言えないのは相手が学だから…？好きだから…？

私はそんな考えを振りほどくように言つた。

「キリがないつて何…？なにかの作業みたいな言い方しないで…」

「俺は…！」

一瞬、感情的になりそうな自分を落ち着かせて学は続けた。

「俺は、ひなの事を真面目に考えようと思つたから…だから

「それはうれしい、うれしいよ…！うれしいけど…」

学の言葉を切り、話し出したけど、言葉に詰まる私。

学は私をなだめるように言つた。

「別に女と別れる事を作業なんて考えてないし、キッチンと理由も説明した。

ちゃんと話し合つて決めたと思つてゐるよ。

……ひなはな、俺とひなが付き合つことで嫌な思いをする人が……って言つけど、それは俺だけに限つた事じゃないだろ?」

そう言われて私はハツとした。

唯衣が櫻井と付き合つことで玲夏が傷つき、私も嫌な気分になつた。

学は私の顔を覗き込んだ。

「……な? 誰かと誰かが付き合つことで他の誰かが傷つく事なんてよくあることだ。

それを怖がつたら、一生恋愛なんてできないって!」

学に踏み出したい、飛び込みたいと思つてゐるのに最後の一歩が踏み出せない。

「例え、それが友達でも……? 友達が傷つくなつて知つても……?」

私は救いを求めるように聞いた。

「それで、ひなから離れるんならその程度の繋がりでしかない友達つてことだろ……。

友達の幸せを喜べないヤツが友達だなんて言えるのか?」

「…………

それは、そうだけど……

学は露骨に苛立ち、深いため息をついてこいつ言つた。

「……ここまではめんじくさい女、久しづり……。」

悪かつたね……。

石橋を叩き過ぎて渡る前に壊れるタイプなんだよ……。

「森繁が自分で言つて来たんだよ。『志摩ちゃんとなんかあつたのか?』って……。志摩ちゃんは、潔癖で引っ込み思案な子だから学も誠意見せなきやね』って……」

潔癖で……引っ込み思案……

「セツセツ…」いつも言つてたなあ…『独りよがりで頑固』つて…

学は意地悪く笑うとそう言つた。

潔癖で、引っ込み思案で、独りよがりで頑固…
当たつてる…。全部当たつてる…
「だから、森繁の事を気にしてるんだつたら独りよがりな思い込み
つて事だ」

そう言つて学は笑つた。

麻美ちゃんが私の事を応援してくれてる…?
考えたらあの子はずつとそうだった…。
いつも人の心配ばかりして、…学に私の携帯の番号教えたり…
ライバルに協力するなんて…おかしいよ…変だよ…麻美ちゃん…。
「学…。」

つぶやくように名前を呼んで、学の顔を真っ直ぐ見た。

「私、学の事信じるよ?…いいの?それでも…」学は真顔で、でも
優しく言つた。

「良いに決まつてるだろ!」

学はそう言つと一カツと笑つた。

学のこんな風に笑う顔、私は初めて見た…。

私はその時…確かに幸せだった…。

ただ、いつもなんか不安…。

何が不安なのかわからないから気持ち悪い…。

バイトの休憩中、唯衣から久しぶりに電話が来た。『ひなに話した

いことがあるから後で行く』

それだけ言って電話を切られた…。

私も学と付き合った事を言いたかったのに…。

今日は学はバイトが休みだったので、迎えに来てくれる約束だったんだけ…。

唯衣と学…鉢合せぢやうな…ま、いつか。

バイトが終わって、唯衣は店の入り口の前で待っていた。

今日は櫻井と一緒に日だったので櫻井もいたのだが、お互い無視である。「ひな、自転車壊れたの？右京君にバイクで送つてもううの

かと思つたら櫻井だし。」

そういえば、右京の家に連れて行かれた以来、ゴタゴタして、唯衣と、ちゃんと話できてなかつたっけ…。その日あつたことも…。

私が口を開こうとした瞬間、唯衣が喋り始めた。

「あたしの話する前に一つ確認したいんだけど、ひな、もう片山の事はいいんだよね？」

いいんだよね？…あきらめたんだよねって事かな？私の返事を待つか待たないかでの間で唯衣は再び話し出した。

「片山はねー…やめな？悪い事言わんから！」

「あ、あのね唯衣」

「アソシはダメ！ひなが泣く事になるから…」

私は話す隙も『えず』に学の事を喋りまくる唯衣。唯衣の勢いは止まらない…。

『…』。唯衣の話が終わってから話すか…

「あいつは彼女がいる！そんなヤツ思い続けて何になる？傷が浅いウチにあきらめな！あたしが男、紹介するから彼女…ねえ…。

私はどこか他人事のように唯衣の話を聞き流してた…

「細つい、小っちゃい彼女連れておとといだつて…」

…おととい…ねえ…

え……つ…?

聞き間違いか、唯衣に訊ねてみる…

「いつ…だつて？」

「おととい」

間髪入れずに唯衣は答えた。

おととい…水曜日…。

確かに水曜日は会わなかつた。

先週も…水曜日はなぜか電話もかかつてこないんだ…。

「……………唯衣、その彼女つて…どんな感じ？髪型とか…」

呆然と唯衣に聞くと唯衣はちょっと考え込み答えた。

「髪型はロングでえ…でもあたし、あの人どつかで見たことあるんだよなー…

えーと…ん~…?どこだつけなー?」

そこまで聞いて答えが分かつた気がした。

なんだか力が抜けてつちゃつて…。

私は脱力した声で唯衣の疑問に一言で答えた。

「みまストア…」

すると唯衣は思い出したようなスッキリした表情で叫ぶ。

「そりそり…みまストアの社員！」

確かひなの憧れの…つて、あれ？ひな、知つてたの？？

唯衣が私に言つた時、学のバイクが私達のすぐ横に止まつた。

「…誰？右京君？」

唯衣がわからないのも無理はない。

まさか学が私を迎えて来るなんて想像もしないよね…

学はヘルメットのバイザーを上げた。

唯衣はその顔を凝視し、驚く。『げつ！片山！？』おなんでもえ！？』

唯衣は私と学を交互に見てワケが分からぬ様子だ。

『「めん、唯衣。隠してたわけじゃないんだけど…』2週間前から付き合つてゐる』

私がそう言つたときの唯衣の顔、おもしろかつた。

唯衣は友達だから唯衣の言つてゐる事、信じたいけど…。

女にだらしなかつた学が、『女とは別れた。全部終わつた』って言つた、その言葉も私は信じたい。

『学…聞きたいことがあるの。…正直に答えて…』

顔からは表情が消え、感情を込めず早口に言つ私に、学は頷いた。

『福井さんとは、まだ続いてるの？』

私のその言葉に学は少しだけ動搖した。

私は学の態度で確信し、唯衣はそんな学を蔑むような目で見ていた。『学つて、ウソつかない人だと思つてた…。去年の冬、『彼女いますか？』って聞いた私に『いない』って答えなかつたみたいに、ウソだけはつかないと思つてた。』

ホントに…

信じた私がバカだつた…

私の様子を察した学が唯衣に言つ。

『月島…おまえ、帰つてくれる？ひなと一人で話したいんだ…。』

そんな学の申し出に唯衣は

『はア！？ひなだけなら言いくつぬめて丸く治めよつとか思つてゐ？』

と率直な言葉を学にぶつけた。

言いくるめられる…か。確かに舞い上がつてた時だつたらそうかもね…

だけど、学の話も聞いてみたい…。どんな…話なのか…

『「めん、唯衣…私なら心配ないから…帰つて…？』

私の言葉に唯衣は素直に頷いて、仕方ないようになつた。

「ひなが、そう言つなら行くけど……。何かあつたら言つてね？」

私は学を見据えながら頷くと唯衣は帰つて行つた。

唯衣がいなくなつた後、しばらく無言の状態が続いたけど、

私がその状態に耐え切れず口を開いた。

「学、言つてたよね、『女とは別れた、全部終わつた』って……私、甘かつたのかな……。学はウソは言つてない。

私がまた都合のいいように解釈したんだよね……？

学、『全員別れた』……なうんて一言も言つてないもんね？……ふふ

日本語つてむずかしい……

嫌味じやなくて、ホントに可笑しかつた。

人間は……特に恋する女は自分の都合の良い様に解釈するものだ……。

好きな男に言われたなら尚更……。良い様に信じたくなるものだ……。

「学の言つた、『全部終わつた』は別れた女とは全部終わつたつて事だよね？」 そう言つて笑う私を悲しそうな顔で黙つて見ている学……。

「……なんでそんな悲しそうな顔してんのよ？『一本取られた』って言つてんのよ。

もつと『してやつたり！』みたいな顔しなさいよ……！

自分でも壊れてきるのはわかってる。

だけど、笑わないとやつてられない……！

「ひな……」

なだめるように学が私の腕を掴む……

「いやだ！触らないでえ……！」

ダダつ子みたに言つて学の腕を振り払つて、現実に引き戻された。

「どうしてよ……？何でそつ中途半端なことするの……？

「中途、半端……？」

この言葉に学もカチンと来たようだつたけど、私は構わず続けた。

「確かに独占したくなるとは言つたけど、福井さんとの関係が続いているなら、

なにも麻美ちゃん達と別れる事なかつたのに……」

「そう言つた時、牧が学にこだわるのつてこういう感じなのかな……？」
つて思つた。この人にだけは負けたくない……変なライバル意識みた
いなもの……。勝てないの、わかつてゐるのに……

学がよつやく私の両肩を掴み、真剣な表情で言つた。

「聞いてくれ……？話すから」

学の真剣な声に私は言葉を失つた。

言いたい言葉がたくさんあつたはずなのに……全部忘れた……。

「美咲とは……別れられない……どんな女と別れても、美咲とだけは……」
ここまで……アッサリとお前の負けだみたいな言い方されると……。

逆に気持ちいいかも……

……なんてウソ。敗北感でいっぱいだ……。

私の様子を見て、学はあわてて言つた。

「恋愛感情があるわけじゃない……。ただ、俺のせいであいつの人生
狂わせた」

……。

なんて言つた……

なんなのよ？その言い訳つて……思つた……。

昭和の時代のドラマとかにありそうなセリフ……瞬櫻井の顔が浮か
んだもん。

……もっとマシな言い訳はなかつたのかな……？

私は深いため息をついた。

「ひな、疑つてるの……？」などと言つた……疲れて返事をするのもだ
るくなつた感じ……。

「信じる、信じないより…冷却期間を置いて…？」

…わからなくなつた…。自分の気持ちも、学の気持ちも…。

学が…私の事、好きかどうかも…」

少なからず学は動搖していた…。

「なんで…？俺の気が持ちわからない…って？」

「『言わなくてもわかる』って思つてる！？そんなわけないじゃな

い…いつも不安だつたよ！」

学、一度も好きだつて言つてくれたことなかつたし…！」

涙ぐみ、言つた私の言葉が学を黙らせた…。

好きだから、信じたい。

好きだから、信じられない。

どつちも私の、ホントの気持ちなんだ…

第13話 身近な非現実

学と冷却期間を置いて、1週間が経とうとしていた。
そんなある日のバイトの帰り、店の前に見知らぬ女性が立っていて、
呼び止められた。

「志摩さん、だつたよね…？」

「あなたは誰ですか？」

知らない人に待ち伏せされるのは牧で慣れていたとはいえ、
あまり気分のいい物ではない…。

私が尋ねるより先に彼女が答えた。

「私は、吉野。吉野悠宇…。」

学くんの彼女の友達。…あなたに話があつてね…」

よく考えたら彼女の顔には見覚えがあった。

確かに…よく、福井さんと一緒に買い物に来てた友達…？

いつも私に攻撃的な視線を投げかけてたつ…？

その友達が、私を待つてたんだ。目的は言われなくても分かる…。
だけど、腑に落ちない…。私は吉野さんに訊ねた。

「話の前に…一つだけ質問があるんですけど、…いいツスか…？」
ピリピリし始める空気の中、吉野さんが頷く。

「今日、あなたがここに来る事、福井さんはご存知なんですか？」

知っているなら…

なんで『学の彼女・本人』が来ないんだ?と思つ…。

知らないと言つなら…

「美咲は…知らないわ」

……話は早いよね……？

「あなたが、私と話して何になるんですか？失礼ですか？けど、あなたには関係ないでしょ？」

妙に落ち着き払った私の話し方が癪に障つたようだった。

「勘違いしてるようだから、これ以上増長させる前に教えてあげようと思つて」

あー……ご親切に忠告しこよ越し下せつたのね……。

聞きましょう……？

「学くんは美咲とは絶対に別れないわよ？絶対に！」

その話は前に学から聞いたな……。

もしかしたらこの人から何か聞けるかもしれないな……

この手のタイプは気分が乗つたら勝手に喋り出す。だから、私から聞き出さなくとも……。

「学くんとはもう、寝たの？」

なんだ！？この女……

そんなことお前に話す理由なんかないだろ！……

何の脈略もなくそんな事を聞いてくる吉野さんに私は素直にムカついた。

そんな私に構わず吉野さんは続けて言つ。

「まあ、学くんが相手なら寝て当然、か。」

人をカラダしか撰り得がないみたいな言い方……。

「気をつけたほうがいいわよ？妊娠させられても責任は取つてもらえないから」

押し黙る私に得意げに話す吉野さん。

「美咲は、学くんのせいで子供が産めない体になつたのよ

……。

この間の学といい、この人といい…

もつ少しマトモな話はできないんだろうか…？

『人生狂わせた』だの『子供が産めない体になつた』だの…
「まあ、よくある話よね？失敗して、妊娠して、墮ろして…子供が産めなくなる。女だつたら分かるでしょ？どんなに辛いか…美咲はこれから先、結婚しても好きな男の…子供を産めないの」

「……。」

子供を産めない女の気持ちは正直言つてわからない。

ただ、辛いだろうな…つて同情の気持ちはある。

「学くんが失敗して妊娠させたばかりに、美咲の人生台無しになつた…。

学くんには責任を取つてもらわないと…美咲の一生分の責任を…それつて…なんかちょっと違う気がする…。

これまで黙つて話を聞いてたけど、ちょっと言いたくなつてきた…。

「かわいそうだね…」

私の『かわいそうだね』に勘違ひして、吉野さんは乗つてくる。
「でしょ？あなたならわかつてくれると思つてた！子供を産めないつていうのは…」

私はすぐに彼女を遮つた。

「違う…そんな考え方しか出来ないのがかわいそうつて言つてんの…」

私の発言に彼女の表情は凍りつく。

私は構わぬ続けた。

「子供が産めなくなつたからつて、人生台無しだ。…なんて誰が決めた？福井さんがそう思つてるかどうかなんて本人にしかわからないでしょ！？」

吉野さんは全身をわななかせて怒鳴ってきた。

「何言つてんのよ！好きな男の子供を産めないなんて、人生、台無しこれされたようなもんでしょう！あんたそれでも女なの？」

「……。」

女ですが、何か…？

子供を産めなくても好きな人と結婚して、幸せに暮らしてる人だつている。

強く生きてる人だつていっぱいいる…。

『人生台無し』だなんて、他の子供が産めない体の女性にだつて失礼だ…。被害者意識、丸出しで、学を繋ぎとめて置きたいだけじゃないのか…？？

そもそも、失敗したのは学だけの責任なのか？

女はただの被害者みたいな言い方も瘤に障る。

いや、ホントに福井さん自信がそう思つてているのかは不明だけど…

なんだか…この人と話す事に冷めた…。

「あなたと、話してもしようがない…友達とはいえ、なにもかも、それこそ、男とベッドにいる時の事まで知つてゐるわけじゃないでしょ…？」

話を切り上げられる雰囲気に持つて行こうとした時、彼女は食い下がつた。

「何余裕ぶつてんのよ…？学くんがあんたみたいのを本氣で相手にすると思つてんの！？」

「…………」

挑発してるとかなんなか知らないけど…

なんかマジで…

この女鬱陶しい…

私はつい思つた事が口に出てしまつた…。

「福井さんに黙つて私の所に来る事自体…『勘違いした友情』…つてヤツ…？」

この言葉がかなりヒットしたようでカツと目を見開き私を睨むと掌

を振り上げた…

こういう時つてナゼかスローモーションに見えるんだ…

ああ…これは当たつたら痛そうだ…とか、

今之内に歯を食いしばっておこう…とか、なぜか冷静にそんな事を

考える…。

まあ、よけても間に合いそうにないし…。

瞬間、目の前が真っ暗になつた…。

バシイ…!

派手な音が響いた…でも、痛くはなかつた。

それもそのはず…吉野さんの手が振り下ろされた瞬間、

私たちの間に割つて入つてきた人が居た。

「いやあ～～～あ！牧くん！？ウソオ～～～」

牧が私をかばうようにして間に入り込んだので、吉野さんの手は牧を殴つていた…。

ただ、彼女の方も、予想もしない角度からの平手打ちだつたため、親指の付け根辺りを強打したようで、それも痛そうだ…。

「やだあ～～牧くん、なんで入つてくるの～？？？ヤダ、口切れてるう…腫れちゃう…」

ホントにパニックなのか、男の前だと態度が変わる人なのか…

動搖し、うろたえる吉野さん…。

私は吉野さんをやんわり押しのけ牧の顔を覗き込む。

ウェットティッシュを取り出して牧の口を流れる血を拭きながら言った。

「…」「めんね。痛かつたでしょ…？」

感情はあまりこもつてなかつた…。ホントにビックリしてたから…。

「あ～も～…いい男が台無しだ…」

そう言つて私が笑うと

「これでやつと普通レベルになつたろ？」

牧は白い歯を二ツと見せて笑つた。

そんな私達を吉野さんは信じられないような物を見るように見ていた。

やがて真顔になると牧は吉野さんを振り返り、

「吉野さん、俺…日向と一人で話、したいから…」

そう、牧が言うと吉野さんは何か言いたそうだつたけど牧の言葉に無言で頷き、最後まで私に挑戦的な視線を向けて立ち去つた。

「ごめんね…痛かったでしょ…？」っていうか、なんで…いたの？」

「友達ン家の帰り。偶然、二人が言い争つてるのが見えて、自転車止めて、二人にじり寄つてんのに、二人とも気がつかねーの…」

そう言つて牧は笑つた。

そりやー…白熱…してたし…？

「あの人、知り合い？」

牧とあの人、親しげだつたから…

「美咲さんは家が近所で、小さい時とか遊んでもらつてたし、あの人は福井さんが高校の頃からの親友らしい。…親しくないって言えば親しくないし、親しいって言えば…そうだな…」

自分で聞いておいて、『あ、そうなんだ』しか言えなかつた

「だけど…な」んで、入つて来るかなあ…？」

もちろん、私をかばつてくれたのはわかつてる。

でも、この間はあんに怒つてたのに…

見て見ぬフリ位、してもいいのに…

牧は真つ直ぐ前を見て、私の顔を見なかつた…。

「…。罪滅ぼし」

牧は言つて私を見た後、すまなそうな顔をした。

「この間は、悪かつた…。」

私はそれには返答せず、

ほんの少し恨み言を言つてみたくなつた。

「ショックだつた…うん、ホントに、ショックだつたよ…。牧に責められた事なんてホントに一度も無かつたから、ほーんとにショックだつた…」

思い出したように言つて、牧の反応を見る…。

「オイ…、

本気で落ち込んでる…？」

私は慌てて言つた。

「ああ、でも、牧がそれだけ麻美ちゃんの事が好きで大事に思つてるつてのはわかつた！」

私はそう言われて牧は少し考え込んだ。

「…確かに大事だし、好きだよ。ただ…付き合つてた時みたいな感情じゃ、ないんだ。

なんか危なつかしくて、心配ださ…。」

「キスしたいとか、抱きたい…とか思わないって事…？」

私は言つて、牧と目が合つて反射的に逸らした…。

そんな私に牧は笑つた。

「なんもしねーよ…。ビビんなつて！」

この間の事がかなり堪えてて…

反射的につい、ビビつてしまつ…。

「この間は、ホントに悪かつた…。反省してます。」

牧は私に深々と頭を下げた。

「いいよ、もう…私も今日も助けられちゃつたし…。」

私はカバンからメモ用紙とボールペンを取り出し、しばらく無言で書き込んだ。

「ハイ、私の携帯の番号。」

私は牧に携帯の番号を書いたメモ用紙を差し出した。牧はじつとメモ用紙を見つめて動かなくなつた。私は牧に言つた。

「…信用してあげる。」

「俺の事…信用して、くれる…のか？」

「いつまでも受け取ろうとしない牧に私は言った。

「…『じめん。…いらなかつた…よね…？』」

私は急に恥ずかしくなった。

…牧が私の電話番号を知りたがつてると

勝手に思い込んだ高慢な態度が恥ずかしかった。

私はメモ用紙を引っ込めようとすると、牧は慌てたような声を出して私の手を掴んだ。

「…あり、がとう…」

牧はずっとうわ言の様につぶやいていた…。

季節はもう、すっかり秋になってしまった…。

「アタシの誕生日、もうすぐだからプレゼント、期待してるよー。」

久しぶりに麻美ちゃんが会いたいと言つたので公園で会う事にした。

「何がほしいの？」

私の問いに麻美ちゃんが元気に答える

「ピアス！…志摩ちゃんのセンスで！」

「えー…？？私、センスないからなあ…」

私が笑いながら困ると

麻美ちゃんがいきなり真面目な顔になつて私のほうを向いた。
すこく不安そうな顔…麻美ちゃんのそんな顔…初めて見た。

「麻美ちゃん？…どしたの？」

私が声をかけると麻美ちゃんは私に問いかける

「志摩ちゃん…あたし達つて、友達だよね？」

予想外の質問…ある意味深いけど、今更な質問もある…。ただ、
思いのほか麻美ちゃんが真剣な顔をするので私は戸惑いながら答えた。

「友達…だよ？…少なくとも私はそう思つてるけど…」

麻美ちゃんは私の返答だけじゃ満足いかないのか、再び問い合わせてくる。

「ずっと、友達だよね？ いきなり会えなくなったりしないよね…？」

「ええ… つー？」

麻美ちゃんは一体何が不安なのか良く分からぬけど私は思つた事を口にした。

「ずっと、友達だよ…？ 例えば、麻美ちゃんが地方に就職したとしてもずっと…」

戸惑つた。こんな弱気な麻美ちゃん見たことなかつたし…。麻美ちゃんはようやく納得して、ニコッと笑つた。

「志摩ちゃんは、自分の事だけ考えてればいいんだよ？ 誰かの事気にして、学から離れたりしたらダメだよ…。あとさ、牧の事もお願ひね…。」

なに？…なに？…私は麻美ちゃんの言葉に強烈な違和感を覚えていた。

なんだか、もう会えなくなるみたいな言い方…。
引越しっちゃうとか言わないよね…？
だけど、その言葉を口にするのが怖かつた。

麻美ちゃんが遠くに行くなんて考えもしなかつたから…。

「麻美ちゃんホントにどうしたの？ なんかあったの…？ 今日は変…」「わつ…かな？…えへへ、そうだね…。どうしたんだるうね…？？」
じゃあ今日はこれから学校の友達と約束してたから…。じゃあね、志摩ちゃん

そう言って別れた。

それから1週間、毎日何事もなく過ぎて行つた…。
唯衣は長年、片思いをしていた瀬戸君と晴れて付き合つことになつて、

構つてくれなくなつたし…。

最近、学はもちろん、牧や、麻美ちゃんからの連絡もない…。
そんなんある日、家の近くで制服姿の牧を見かけた…。
なんだか忙しそうで、声をかけてもいいものか悩んだが、
声をかけてみることにした。

「よー。牧ー！」

牧は私に気付いて近づいてきた。でも、そこに笑顔はない。
「なんか…顔色良くないね？…なんかあつた？」

私が顔を覗き込むと、

今にも泣き出しそうなをグッと止らせる牧の顔…。

私は牧の様子にぎょっとした。

「…ね？牧？？どうした？？？」

私は慌てて牧に問いかけた。

牧は、答えた。

「麻美が轢き逃げされた」

……なんて言つたのか、よく聞こえなかつた
いや、理解できなかつた…。

「え…つー？」

私の問いに答えることなく牧は続けて言つた。

「轢き逃げされて…発見が遅くて…意識が戻らねえ…」

ガクガクと震えながら牧は言つた。

私は、命があつたことを聞かされて安堵した。

意識がないのは不安だけど、でも、生きていてくれて良かつた…。

「これから…麻美の所行がないと…。俺が行つたつて何もできない
けど…そういうことだから…」

急ぐ牧に追いすがるようにして私は言つた。「私も…つ！私も連れ
てつて！…お願ひ」

「行つてもしようがないって…あいつ、意識がないんだ…あんな

あいつ…日向は絶対にショック受けるよ…。」「

私を突き放すように言つ牧に私は何度も言つた。

「お願い…牧…。私、麻美ちゃんの近くに行きたいよ…。」「

言つてもムダだとわかつたのか、牧は私を病院まで連れてきてくれた。

麻美ちゃんのお母さんは、毎日、寝ないで麻美ちゃんに付きつ切りで、貧血を起こし倒れ、今、処置室で点滴を打つもひりつてこらじい…。

病室に入つて、ベッドを見ると…

体のあちらこちらに包帯を巻いた麻美ちゃんの痛々しい姿があつた…。

麻美ちゃんの体には色々な器具が取り付けられていて…。

「だから、言つただる…？元気に跳ね回つてゐる麻美を知つてゐるヤツなら誰だつて…やりきれねえよ…。」

牧は涙ぐむ。

「そばに行つてもいいかな…？手を握つてあげたいの…。」「牧は鼻をすすり私を促す。

私はそつと麻美ちゃんの手を握つた。両手で包み込むよつと。

「麻美ちゃん、もうちょっとで誕生日なんでしょう…？

こんな所で寝たまま過ごしていいの？私ね、ピアス、買つたよ…？
麻美ちゃんに似合いそうなの探した。麻美ちゃんの喜ぶ顔見たくて、一生懸命選んだよ…？」

いくら私が話しかけても麻美ちゃんからの返事はなかつた…。

それでも私は話かけたかった。

「ずっと友達だよね。約束したよね…？

…だから、私の話を聞いて…？私を見てよ…。お願いだから…麻美ちゃん…！」

私を見ていたまれなくなつたのか、牧が止めに入る。

「もう、やめな日向。いくら呼んでも麻美は」

！！？

「ま、牧、見た？…今…」

「え…？」

「…！」

「あ…」

麻美ちゃんの手が微かにだけど、私の手を握り返した…。

「み、見たよ！見た、見た！て、て、手が…麻美！」

私達は揃つて麻美ちゃんの顔を見た。

目尻から一筋の涙が流れていった…。

牧は大急ぎでナースコールを鳴らし、私達は再び麻美ちゃんに語りかけた…。

あれから1週間…

牧とは頻繁に連絡を取つてゐ…。

つて言つても、受け取り専用なので牧からの電話待ち。
麻美ちゃんの容態は一向に回復しないようだ…。
近い内にまた麻美ちゃんに会いに行く事にする…。
行つても、結局なんにもできないんだけど…。

約1ヶ月ぶりに学から電話が来た。

『森繁が事故つたの…知つてる…?』

「うん…轢き逃げなんでしょ…?」

言つた後、重い空気になつた…

『その、犯人、捕まつた事は…知つてる?』

犯人…?捕まつたんだ…

『恩田が言つてた。…けどそれ以上は教えてくれなかつた』
私、頻繁に連絡取つてたのに…。牧は教えてくれなかつた…。

『ひな…。あのさ…』

「今度の日曜、麻美ちゃんの所に行くんだけど、学も一緒に行かな
い…?」

『え…あ、いや、』

学の返事はなんか気が乗らなそつだ。

「わかつた、じゃあいい。それじゃあね…。」

隙を与えたら『別れよつ』つて言われる気がして、私は急いで電話
を切つた。

しかも、あれから初めての電話がこんな暗い話題か…。

麻美ちゃんが早く元気になつて、それが話題になるといいのに…。

田曜日、昼過ぎに牧と麻美ちゃんの病院に行く約束をしている。

待ち合わせは近所のバス停。

なのに、牧は来ない…。

何度バスを見送ったことだらう…？

一人で行こう。何度も思つたけど、行き違いになつたらヤダから待つた…。

牧のくせに～～～～（？）！

約束すつぽかして何やつてるんだらう…？もしかして先に行つた？

私はとりあえず牧の家まで行つてみることにした。

呼び鈴を鳴らしても誰も出でこない…

行き違いになつた…？私はバス停まで引き返そつと思つた…。

「よーよー…」

家から声がする…。上を見上げると一階の部屋から牧が顔を出している。

牧の顔を見た瞬間、怒りがこみ上げてきた。

「何してんのよ…？約束の時間からもうつ3時間も待つたんですけど

！」

私が言つと、牧はだるそつにこう言つた。

「あー…約束してたつけ？…行くの？」

その態度が私の怒りに拍車をかける…。

「行くの？…じやないよ…行くから3時間も待つてたんじょーが！

！」

牧は私の言葉に動じることなく返事をした。

「わかつた、わかつた…。支度するから、家に上がつて待つてうよ

私は怒りが收まらず、鼻息を一回吐いた。

「おじやましまーす…。」

私が玄関を見渡すと牧は部屋から私に言つ。

「おー……い。今、家、誰もいねえんだ。自分で上がって来いよ」

「ハイハイ。」

私は怒りが収まらず大きく鼻から息を吐いて、階段を上つた。

「ひつち

私は声がした部屋のドアを開けた。

牧は窓際にあるベッドに腰かけて外を眺めていた。

ほーお？ 3時間も人、待たせてた割には随分、優雅に過ごしてたのね？

「……何怒つてんだよ……」

「怒るよ普通！ 行きたくないなら、行きたくないで連絡くれてもいいのに！」

牧がダラダラやつてんの知つてたら私、一人で行つてたよ！」

私が本気で怒つてるのに、牧は弁解するどころかだるそうだ……。

「ムダだよ……行つたつて……」

ずっと、眠つたままだからつて……意識が戻らないからつて……

投げやりになる気持ちはわかるけど……

「牧……そんなこと言わないでよ……麻美ちゃんは……」

牧はあきらめたように言葉を吐き捨てた。

「死んだよ……」

何言つてんのこの人……？

血の気が失せていくのが自分でもわかつた……。

冗談にしては笑えない……。胸の底から気持ち悪い何かがこみ上げて

きて……立つてられなかつた……。私は膝から崩れ落ちた……。

「ウソだ」

私はゆつくり首を振つた。
信じたくなかった……

「ウソじゃねえ……」

牧は冷淡に言つた。
信じられなかつた！――

ウソだ、ウソだ、ウソだ、ウソだ！――ウソだ！――

「ウソだ！そんなの絶対信じない――！」

「ウソじやねエ――！」

牧はその場から動かず、取り乱す私を一喝した。

その後、少しして牧は私に言つた。

「日向には言わないでおこうと思つた。言えば……俺と同じ気持ちになる。」

牧は表情を崩さず静かに言つた。

私はその顔を見てちょっと怖くなつた……。

まるで仮面みたいだつたから……

顔の作りが端整なだけに、それが余計に……気持ち悪かつた……

「麻美ちゃん……は……いつ……？」

私は自分が気付かないうちに泣きじゃくっていた。

「月曜日……」

月曜日……今日は日曜だから……ほぼ1週間……？

「1週間……？1週間も知らなかつたの……？？私だけっ！……私だけ知らなかつたの！？」

牧は小さいため息をついた。

「学が連絡してくれるもんだと思つてた」

あの、きこちない話し方は……この話をしようとして……？

「学……つ犯人……捕まつ、たつて……」

「未成年だつて、さ。俺らと変わらない年齢……。友達と出かけた帰りの麻美をナンパしようとして声かけて、シカトされたのに腹立てて、車で煽りまくつたんだつて。」

私は牧の言葉を黙つて聞いていた。

「疲れたところを、ちょっとぶつけて悪戯するつもりだつたのが、強く当たつて……。怖くなつて逃げ出したんだと」

悲しみと怒りで……

頭がおかしくなりそうだ……！

牧は突然笑い出した。

「許せないよな……？けどさ、犯人は未成年なんだよ。『将来ある有望な、なんたら……』

とか言つて……罪もチャラみたいなもんだる……。」

悪戯目的で、殺意がなかつた未成年……？それだけで、麻美ちゃんを殺した罪が軽くなるの……？人殺しに『将来』も『有望』もないよ！

麻美ちゃんの『将来』を返してよー！

頭が痛い…。

人間、泣きすぎると、頭が痛くなるんだ…。

目も、何もかも焼け落ちてしまつそくなぐらい熱かつた

「一気に色んな事実知ると…キツイだろ…？」

でもさ…俺、日向がうらやましいよ…。

そんな風に感情をすべて涙にして流せるから…。

…俺、涙一滴も出ないんだよ…」

悲しいときに泣けないのは…心の底から悲しいときだ…。私みたいな泣けるのはまだ、幸せなんだ…。

涙がすっかり引いてしまつた…。

私が声をかけ、近づこうとした時、牧は言つた…。

「俺……、どうしたらいいんだ？」

牧…目が私を捉えてない…いつだつただひつ…？

前にもこんな事があった…。

麻美ちゃんが、学と別れたのを牧が知つたとき…。その時みたいだつた…

「俺も、死ねばいい…？ここから飛び降りたら…死ねるかな…？」
瞬間、牧は私に掴みかかり、強く揺さぶる…

「なあ？俺はどうすればいい！？なあーもう麻美はどこにもいないんだー！」

今の牧はさつきの私…。

牧も…1週間経つてやつと自分の感情を吐き出しているんだ…。

私はしばらくされるがままに揺さぶられていた…

…牧の辛さがわかるから。

やがて、私の体から離れ、カッターナイフを手にし、自分自身に刃を向けた時に本気でヤバイと思って牧を止めた。…が、暴れる、暴れる…女の力で、本気の男を止めるのは無理に等しい！牧の持つカッターナイフが私の胸をかすった。

「…………！」

一瞬、我に返り牧の動きが止まつた。私はすかさず手の甲で牧の頬を払つた。

「生きてる人間が命粗末にして、そんな事して麻美ちゃんが許すと思つてんの！？」

必死だつた。勝手に体が動いて、自分が怖かつた。牧が呆然と立ち尽くす…。私は牧からカッターナイフを取り上げ、ゴミ箱に放つた。

牧の両肩を掴み力の限り牧の体を揺さぶつた。

「牧、牧！！見て！私を見なさいよ！！」

取り乱した人を元に戻すにはこうするのが一番だと誰かが言つていた。

「…日向…」

「良かつた…ちょっと心配な取り乱し方だつたから…」

安心したら…。急に傷口が痛み出した…。

切れ味の素晴らしいカッターだったのか、

牧の力が凄まじかつたのか…

よく見たら私の胸、血だらけです。

ま、命に別状ないでしょ？…良かつたー！ムダに脂肪があつて…（？）

ブラの部分をかすつてたら無傷だつたのに。と、思うけどね…。

「さあ、救急車…」

男は血を見ると動搖する生き物…。

牧も例外ではなかつたよつで、胸から血を流す女を見てかなり動搖する。

「いいの！大丈夫…かすつただけだから…。牧は、自分の事だけ考えればいいの！」

でも…服、貸してくれる…？この格好じや、さすがに帰れない…」

服の胸元はさつくりと切れていで、血に染まつてゐる。

こんな姿を家族に見られたら…変な誤解をされてしまつ…。

牧は領きタンスから自分の服を出し、私に手渡すと再びベッドに座り込んだ。

今の牧はボーゼンとしていたから、…私の事を見てないよつたから、牧の前で着替える事にためらいはなかつた。

傷口からの出血はほとんど止まつていて、血が乾いて、固まつていて…。

私は素早く牧の服に着替え、最後のボタンをかけ終える時、牧は言った。

「…………なんにも…する気が起きないんだ…からっぽ…希望が、無い…生きてるのが虚しい…苦しい…」

生きている者が命を持て余す事は死んだ者にとつて失礼なこと…。だけど、死んでしまつた者が大切であれば大切であるほど、自分で大きな存在であればあるほど、心を開いた穴は大きい…。牧がどれだけ麻美ちゃんの事を大切に思つていたのかがわかる…。

私は牧の前に立ち、言つ。

「わかるよ…。私なんかより、牧の方がずっと苦しいよね…？ずっと一緒にたんだもんね…」

牧は、私の顔を見上げた。

目が合つた瞬間、牧は私に言い聞かせるように言った。

「田向…もういいから…帰れ…」

私が帰つた後に、変な気を起しにされても困る、私は首を振つた。

「俺、変な気、起こす前に…帰つてくれ…」

「…私が帰つたら、誰が牧を止めるの?」

ついに耐えかねた様に牧は怒鳴つた

「俺がお前に変な気、起こす…つづってんだよ…！」

俺が本気でお前に襲いかかつたら…お前の力じゃ止められねェだろ…

…止められねえよ…」

そんな事、今、牧に言われるまで全く考えもしなかつたんだ…。私は、どうしてだろう…？そんな牧を突っぱねて逃げようという気が起きなかつた…。気が気が付いたら私は牧を抱きしめていて…

「牧、大丈夫だよ…」

今、成り行きで突つ走つたらきつと後で後悔する…。
だけど…この状態の牧を見捨てるくらいなら、

後の後悔なんてどうでもいい気がした…

牧は私の予想外の行動にしばし固まる。

私は牧から体を離すと、自分から牧に口づけてた…。

牧は力任せに私を抱きしめ、私の体をベッドに横たえた…。

ベッドから抜け出し、服を着る私に牧はつぶやいた。

「…………すまない」

私は驚き振り向くと、ベッドから身を起こした牧は言った。
「こんな……俺……日向に……こんなひどいこと……俺……こんな事する
つもりじゃなかつたんだ……」

牧は、さつきまでの行為を後悔するように自分を責めた。

「ごめんな……ホントに……」

牧はベッドの中で頭を抱え込み、体を震わせて泣いた。

私は牧に近寄り、顔の高さを牧と同じにするようにかがんだ。
「……私の事で、自分を責めて泣いたらダメだよ……」

私、『ひどいこと』なんてされてない。

さつきの事は『必要なこと』だった。

牧だけじゃない、私にも『必要』だった……

『必要』だった。

それは牧に言い聞かせた事じゃないのかも知れない……。

私自身に言い聞かせた事だったんじゃないのかな……？

なんだかんだ、理由をつけて、牧を利用したのかも知れない……。ら
わせるために……

利用したのは私の方だったのかも知れない……

私は、ずるい女だ……。

第15話 気持ちが痛い

『後悔しない』なんて思わなかつたわけじゃない。

絶対『後悔する事』はわかつていた。

だったら、私…どうしてあんな馬鹿な事をしたんだろう…？

牧を助けるため？

麻美ちゃんがいなくなつた悲しみを忘れさせようとしてた…？
私に、そんな力なんか、あるわけないのに、いい気になつて…。
弱い人間が、人を救おうなんて、考えるからこうなるんだ…
私は、3日経つた今も、考へても仕方ない事ばかり考へていた
夢だつたと考えられればいい…
だけど、麻美ちゃんはもういない…。

癒え始めてる胸の傷が、夢じやないと言つていい。

牧のことは好きだし、信頼もしてる。

だけど、それは学を好きな気持ちとは全然違つ。

…あくまで『大切な友人』として…。

それをハッキリと気付かせてくれたのは学からの電話だつた…。

『今から会いたい』の学の電話に『嬉しい』と思ひながら、
罪悪感でいっぱい…

同時に学が好きなんだと感じるんだ…痛いくらいに…
私は学の元へ向かつていた。

待ち合わせは学の家の近所の公園…。

麻美ちゃんと会う時はいつも利用してた公園。

学の家に泊まつたあの日から私は学の家に行く事を避けていた。

学の元へ向かう途中、牧と会った。

お互い、一瞬歩を止めた。

しかし、お互い言葉を交わすことなく牧が歩き始め、私の横を通り過ぎた。

その時私は例えよつも無い淋しさを感じた。

考えてみれば、最初は牧の事、大嫌いだつた。
何考えているかさっぱりわからなかつたし、不信感でいつぱいだつた：

私の周囲から消えて欲しいとさえ思つていた。

麻美ちゃんが現れてからだ…牧と色々話して、わかつていつて…。
信頼できて…。
だから…麻美ちゃんがいなくなつた今、
私と、牧の関係も終わつてしまつたんだ…。

公園に行くと学はベンチで待つていた。私は学の横に座つた。
しばらくの沈黙の後学が話しだした。

「会えない間、ずっとと考えてた…。」

会わない間…すじく長かつた。

色々な事がありすぎたけど…。やっぱりすじく長かつた。

「俺はずつと、ひなの事ばかり考えてたよ。」

そう言つて、学は私を見た。

「寝ても醒めてもひなの事ばかり…バイト中でも…。

こんな事今までなかつたのに…」

嬉しい事を言われてるのに…私の心は複雑だった。

「俺、わかつたんだ…。俺は、やつぱりひなの事…ひな ひなが…学の口から大事な事が発せられるという、大事な場面で私の携帯がなった。」

今日はせっかくの休みで、しかも学と会つていて、

『バイト、替わつて下さい』なんて言つ電話なら出たくなかった。

「……出ないの？」

学が不思議そうに見ている。

仕方がないので電話を取つてみる…。

『俺』

私が電話に出るなりそう言つて来た…。

『牧。…さつきは、ごめん。いきなりだつたらビックリして…顔合わせにくかったし…』

「別に、気にしてない…」

『傷は…痛む？化膿とかしてない…？』

「平気、気にしないで…」

近くに人がいるからだろうか…？

妙にそつけない口調になつてしまふのは…？

『日向、俺、大丈夫だから…。なんていうか…うん、大丈夫だから』

そう言つて牧は一方的に電話を切つた。

『……牧』

「恩田？あいつ…なんだつて？」

「『俺は大丈夫』だつて…」

私はそつけなく言つて、暗くなる様子を学は察したのだろうか？

妙に明るく振舞つて、私に言つた。

「今日、家に誰もいないんだ…。…………泊まる？」

私はゆっくり首を振る。

私の胸には隠せない傷がある…。

学には見せられないよ…こんな醜い傷なんて。

「 もっ カ… 」

学はさみしそうに言つた後、氣を取り直してこう言つた。

「 ひな… 渡したいものがあるんだ。 」

そう言つて、ポケットから包装された箱を取り出した。学は私にそれを手渡して言つた。

「 開けてみて 」

私は学の様子を窺いながら恐る恐る包みを開けた。箱の形狀からも推測できただけど、箱の中身は…

指輪だった…。

…すゞく、高そづな…

私は箱の中身を確認すると慌てて箱を閉めた。

「 学、私… これは受け取れない…。 」

私は学の顔をまじまじと見つめ言つと、学は慌てて言つた。

「 あ、深い意味はないんだ… ただ、『 テートラシイテートもしてあげた事なかつたし、

プレゼントだつて一回もあげた事なかつたから… それは俺の気持ち 」

俺の気持ち… ?

「 でも… だつて… 気持ちにしたつて… こんな高価な物は… 」

値段なんて関係なかつた。これが、安物のピアスだつと『 プレスレットだつと…

私には学の気持ちを受け取れない…。

「 高価つて程の物でもないよ…。確かに、安物でもないけど…。自分の彼女に気持ちを贈るんだ。コレくらい当然だろ…? 」

学はそう言つて笑つた。

…私は…

涙が止まらなかつた。

単純に嬉し涙なら美しい。

だけど、私は懺悔の念でいっぱいだつた…。

例えどんな理由があるにしても、

私が犯した行為は学に対する裏切り行為に他ならない…。

痛いよ…………！

学が優しくしてくれれば、くれるほど…胸が痛いよ…。学の気持ち
が胸に痛いよ…！

「できないよ…。受け取れないよ…私…。」

学はうれし泣きと受け取り、私を抱き寄せよつとする。
私はそれを振りほどいた。

「ダメだよ…ダメなんだよ…。私…」

ダメ…………！

学を失いたくないもう一人のずるい私が邪魔をする…。

「私は…」

ウソをついて学の気持ちを受け取る事なんてできない…！

「ひな、どうした…？どうしたんだよ…？」

ようやく様子がおかしい私に気付き、学は私の両肩を掴み、優しく
訊ねた

「私は…学を裏切つた…の…私…つ、私…私…つ牧と寝た…つ…」

言ってしまった…後悔しても、もう遅い…。
学の表情は一瞬にして凍りつく。

「なん…だつて…？…今、なんて言つた…？」

私の腕を掴む手に力がかかる…。

「ひな！今なんて言つたんだ…？…なあ？言えよ…なあ…」

「……………つ」

私はギュウと目を閉じる。

学は私の腕から手を離した。

「俺が、ひなを責める資格はないよな…俺だつて、今まで散々色々な女と遊んできたんだ」

突き放すように学は吐き捨てた。

「そんな言い方しないで…私達は」

「『私達』…？…なんだよ？本気だつたとでも言いたいのか…？」

感情的になる学に私は言つた。

「違うよ…私と牧の間に恋愛感情なんてなかつた…でも…」
私が言つと学は深いため息をついてから私を睨んだ。学は私の心を見透かすよつに睨んで、こう言つた…。

「森繁がいなくなつた心の傷を一人で舐め合つた…つて事だろ…？」

「……………つ！」

図星だ…。

それ以上学に何も言えなかつた…。

「最低だ…」

遊びだつたつて言つてくれたほつが…まだマシだつたよ…！」

学は私の手から指輪を奪い返すと、それをゴミ箱に力任せに放つた

…。

そして私に背を向けて立ち止まつた。

「本気になつてこいつ思いをしたくなかったから…今まで遊んでたんだ…」

そう言いつと学は歩き出した…。

私には学に追いすがる資格も、気力も無い…。

バカな女…。

割り切る事も出来ないくせに、忘れる事も出来ないくせに…。

ズルズル引きずつて、結局…一番大事な人を失ってしまった…。

私は最低最悪のバカ女だ…つ。

最終話 一番好きー

季節は冬、正月が終わつたところだ…

ここ最近の私はいいとこナシだった…。

バイトでも凡ミス連発…新人でもミスしないよつな…環境にすぐ影響されて、ダメになる。

私はこんな弱い人間だつたんだと痛感する…。

「志摩さん？」

バイト中右京に声をかけられて慌てて謝る私に絶句する右京…。

「わ、私最近怒られ続きでさ、で…何？」

「俺…最近…玲夏ちゃんの事が気になつてて…。紹介してもらえたんか？」

「もしかしたら彼氏とまだ続いてるかも知れないけど…。聞いてみるね」

慌てる私にさりに右京は慌てる。

「いーいいいい。いい！やつぱい！」

は…？いいの？

私は思つた事を口にした。

「…恋愛がなきや生きられないバカな男にはなりたくないし…」

去年の秋、あの公園以来…学とは会つてない。もちろん、牧とも…。

「そういえば、あの金髪…名前なんだつけ？最近来ないよね？」そ
ういえば、右京と牧はよくケンカしてたつけ…？
懐かしいな…。あの時は必死だつたのに…。

「最近、ガソリンスタンドの人も両替に来なくなつたし…」

…多分、学の事を言つてるのかな…

ガソリンスタンドの人は毎日両替に来るし…。

ただ、学じゃない人なだけ…学、バイト辞めたんだろうか…？

もう関係ない人なのに、気を抜けばすぐ、彼のことを考えてしまう。

「就職活動に忙しいのかもね…。右京はどうなの?」

「俺?…俺は全然ダメ」

もうすぐ高校卒業する右京でさえ、就職が決まらない…就職難だ。中卒の私は就職の期待なんてできるわけもない…か。ハイハイ…。

「地方に行けば学歴関係なく雇ってくれる所もあるらしいけど…俺は遠慮します…」

地方…か。私も考えられないな…。

母親が猛反対しそうだ…。絶対、子離れしてくれそうにないし…。家族から離れて一人、やつていけるのか?つて聞かれたら正直自信は無いな…。そんな事を考へてる時、入り口の自動ドアが開いた。右京はそそくさとどこかへ行つてしまつた…

ん…?ああ…ガソリンスタンドの店員か…。

…学?なんだか雰囲気が変わつて一瞬わからなかつた。落ち着いたね…。なんだか大人っぽくなつたつて言つか…。

両替しながらそんな事、考へてた。

学が意を決したように口を開いた。

「バイト終わつたら…会えない?」

学とは、あの日以来会つてなくて…

一応…『冷却期間中』つて事になつてゐるのかな?…学の中では…。

私の中ではもう、フラれたつて思つてたけど…。

あきらめがついていたのに…

改めて学から別れを切り出されるのが怖い…。

また、ずるい私が出てきた…。

「わ、私…つ、今日は早く帰らないと…つ。見たいテレビがあつて

「日向…!!」

学にそう呼ばれて驚いて、黙つてしまつた…。

「お願ひだ…。10分でいい。…5分でいいから…」

……きちんと自分の口から別れを言わないとスッキリ出来ないって事なんだね……？

「わかった……いいよ。5分だけだつたら……」

私がそう言つと学は少し安心した表情になつて、店を出て行つた……。バイトが終わるのが怖い、別れを言わるのが怖い……。この期に及んでまだそんな事を考える自分が恨めしい……。

開き直れ！

男なんて星の数ほど……だ。学だけじゃない。きっと、私の事を好きになつてくれる男はたくさん（？）いるハズだ！ そうに決まつてる！ その中には学以上のイイ男がいて、死ぬほど恋してやるんだから……まいつたか！

……。それには、学にフラれるのが第一条件なんだけどね……。

バイトが終わると学が外で待つていて、その顔にドキッとした。思い詰めてる時の顔もかつこいい……

……なんて、最後の最後までバカなことを考えてる……。

「おまたせ！」

自分の考えを打ち消すように学に声をかけた。学は顔を上げ、淋しげな笑顔を私に向けた。

「…………」

なかなか言葉を見つけられない学に、私は言つた。

「あと、4分24秒」

「え？」

私の言葉に学はは感ひ。

「ボヤボヤしてたら5分以内に言いたい事言えないで終わっちゃつ
ひやけつさ終わっちゃつ」

「あ？」

やつこつ私を怪訝な顔で見つめる学。

「ケジメ… つけて来たんでしょ？」

私この言葉に学がハツとした表情をした。

「…俺、思い詰めた顔してた？」

私はゆつくりと頷いた。

深い深呼吸の後で覚悟を決めて、私は学に言つた。

「私はあの日で終わつたんだと思つてた。だから、覚悟ははできる

…。

改めて『別れよう』『やめなさい』…

私の言葉に学は慌てて入つてきた。

「えよ、ちよつと待つて…え?なに?別れるつて…?」

私は学の慌てた様子にきよとした。

「え? だつて…話があるつて言つから…私でつまつ…。じゃあ、学
の話つて??」

学はヤレヤレと言つた風に首を振り、大きな深呼吸をしたあと、私の田を見て言つた。

「俺、就職決まった。」

この就職難で就職が決まったと言つおめでたい話。私は自分の事みたいにうれしくなつた。

「おめでとう！よかつたね！…で、どうに決まったの？？」

一瞬の沈黙に『まずい事を聞いたかな？』と思つてしまつた…学は相変わらず私の目を見ていて、少し笑つて言つた。

「東京の会社だよ…東京の電子工業…」

学は東京の会社に行く…それはお互いが離れる事を意味する…学は別れる気がないみたいだから、遠距離恋愛つて事になるのかな…？

…東京…。

そんな都会に行けばこんな田舎の、こんな女の事なんかすぐ忘れてしまう…。

「ひな、俺についてきて欲しい」

…！？

聞き返すと、『無理ならいいんだけど』って、言つのが学のクセなんだけど、

重要な事をサラッと言われた気がする…。

私は聞き返さずにいられなかつた。

「ひな……俺と一緒に向こうに行こう……俺についてくれ」

聞き間違いやないことがわかつて私はうろたえる。

「思いつきでバカな事を言つてる……って思つてんだろ……？」

そりやそうだよ……そんนすぐには破綻してしまこそうな計画……
真面目に考えるやつなんて……

「真面目に考えたよ。……ずっと考えて、悩んで、俺なりに出した答えなんだ。

……ひな一人ぐらい俺が面倒見られるよ……贅沢しなければ……」

簡単に大変な事言わないでよ……！

「そんなこと、福井さんや吉野さんが許さはすない……それに、
学はきっと私を重荷に思つよ……。」

私が不安をぶちまけると学は怪訝な顔をした。

「俺が、ひなを重荷に感じる……？ そんな、起こるかどうかわからな
い事を想像して躊躇するのか……？」

「…………。」

嬉しくないわけ、ないじゃない……？

好きだって気持ちだけで突っ走れるなら、すぐにでも『ついて行く』
って言つてる。けど、現実を考えず突っ走れるほど、勇気はない
んだよ……。

学は、私の手首をグイッと引き寄せると私を抱きしめた。

「美咲とは…別れたよ…もうホントにお前だけだ。日向…。本当に
もつ、俺にはお前しかいない…何も考えずに俺について来てくれ…
！」

目の前がグラグラして、眩暈が止まらない…。
学の言葉はまだ続く…。

「一生、そばにいてくれ…。絶対大事にするから…。だから…。」

私を抱きしめる学の体が震えてた…。

好きな男にこんな事を言われて…嬉しくないヤツがいますか…？

とつぐに別れたと思つてた男が…

好きで、好きで仕方ない男がこんな事を言つてくれてる…
でも、不安で仕方ないのも事実で…

家族と離れて、友達と離れて、やつていけるのかな…？遠く離れた
土地でもし、学の気持ちが離れた…？

考えると怖いけど、そんな事ばかり考えてしまつんだ…。

ホントはついていきたい…。

何も考えずに学についていけたら、どんなに楽だらつ…？

好きだけど、好きだから…色々考えてしまつ…。

学は私の体を離し、淋しげな表情を浮かべた。

「すぐに返事しろなんて言わないよ。

…卒業まで、あと1ヶ月半ある。それまで待つてる。卒業してから、
向こうに行くまで1週間あるし…。じつくり考えて答えを出して欲
しい。」

そう言われてから1ヶ月真剣に考えた…。雪が振る2月の事…。
私なりに考えて、きちんと答えが出せた。

私は覚悟を決めて、学に会いに行く…。
大事なものをポケットに入れて…。

いざ、学の家の前に立つと呼び鈴を鳴らす、指が震える…。
勇気を奮い立たせて、呼び鈴を鳴らすと、すぐに学が出てきた。

「……ごめんね、電話もしないで勝手に来ちゃって…」

緊張のせいで声が震えているのが自分でもわかる…。

「返事…聞かせてくれるんだよね…？」

私はゆっくりと領き、自らの衝動のままに行動した。
私は学の首に腕を回し、抱きついた。
そして、学を見つめて、困惑の学に囁いた。

「学…一番、好き…つ…」

何に対しても一番好きなのはわからない…。世界で一番?今まで会った人の中で一番?生涯で一番…?

それは、自分でもわからなかつた。
でも、それしか言葉が見つからなかつた…。
私はすかさず学にキスした。
ワケもわからず、ただ私を受け入れる学…。
落ち着いて、学から離れた私は言った。

「学の事、好きだよ。…ついていきたい…。
何も考えないで、ついて行きたいよ…。
でも、好きな気持ちだけじゃついて行けない…。
ついて行つても、ただ、学に寄りかかる事しか出来ない…。それが

わかつてついて行く事はできないの。好きだけど、好きだから…現実的なことしか考えられなくて…。先の事が不安で…。

私は、あなたにはついて行けない…ついて…行かない…」

私はポケットから取り出したものを学に差し出す。

「これ…。以前私にくれようとした指輪。学がが捨てた指輪。…なんか、捨てたままに出来なくて…私が拾つて、持つてた…。これ、返すね。学が『俺の気持ち』だつて、くれた指輪…。私の見てないとこりで捨てて。じゃないと私、また拾つちゃうそうだから…。」

私はそう言つて学に指輪を手渡した。

「プレゼント、突き返してきた女なんて、お前が初めてだよ、田向…。」

「これ以上ないくらい切ない表情で言つた後、学は思いつきり私を抱きしめた。

「俺をフツた事、一生後悔するかもよ…」

「…かもね。心変わりして、当田一緒にいくつて言こ出すかも…」

そう言つて私は[冗談めかしに笑つた。

「…つ、行くの?…私、見送りする…」

きちんと恋を終わらせるために…

「3月の……」

「それ……私の誕生日だ……。」

私は毎年、誕生日にはよくない事が起る。でも、今年の誕生日は、ホントの意味で新しい私になりますよ」と。

私の誕生日、学の出発の日……私は学を見送るため、空港にいた。辺りは「み」みしていく、なかなか学を見つけられなかつた。

「田向！」

この人「み」の中私を見つけて声をかけてきた人がいる……。振り返ると牧だつた。

「『なんだ牧か』……って顔すんなよな……お前つてホント顔に出る……」

そう言いながら牧は私を別の場所まで案内した。人の少ない休憩所に来て、私は牧に尋ねた。

「牧も学の見送り？」

牧は言い辛そうに私の顔を見て、覚悟を決めて言った。

「田向、学はもう行つたよ……。」

「……！」

私はやり場のない怒りで牧につつかつた。

「どうしてー？学は2時46分の便で行くつて……」

牧は辛うじて表情を浮かべてやつて、葉を吐き出した。

「…。その前の… 1時5分の便で、行つたんだ…。」

私は何も言ひ事が出来なくなつてしまつた…。

「『田向にいよならうって言われたら泣きそうだから会わないで行くつてさ。』

しつかし、あいつがわざと女にハマるとはね…。」

半泣きの私に牧は続ける。

「実はさ…俺と田向がその…なんだ、た事…田向が学に言つたの…？ なんとかあいつ知つててさ、……俺、あいつに殴られた… これでもか…って程、殴られたよ…。 女の事で学があんな風になるの初めてだ。うん…なんていうか… 田向の事、本気だつたんだな…つてさ」

…そんな事、今更聞いても…。

「あと、伝言…『俺も一番好きだ…』ってさ…。」

…遅いよ…。

そんな事、今更聞いても遅いよ…。学…！…！
涙がブワッと溢れてきて、止まらなかつた。

私はずっと、泣き続けた。そんな私を牧はずつと見守つていた…。

「色々あつたよ。田向と会つてからの数ヶ月間は特に…」

「…私も」

泣きつかれた日に痛いくらいに夕日はまぶしかった。

「あさつてから、俺も東京で就職だ……でも、この数ヶ月は忘れられないよ」

「……うん……私も忘れないよ。学も、牧も……麻美ちゃんも……」

それぞれ、別々の道、進んで、きつい事もあるだろうけど、

16・17・18歳…自分で一番輝いたこの日、この時を勲章にして

最終話　一番好きー。（後書き）

自サイトから引っ張つて手直しした作品です。
初めての作品だけに特別な思い入れのある作品です。
最後まで読んいただき本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1226f/>

キミに逢えたから

2010年10月28日01時03分発行